第五章 纯粹概念【时】

#北大陸の中心地は、『遺跡街』と呼ばれる未開拓領域になっている。

北方的未开拓领域的中央，有一块被称为『遗迹街』的地方。

#　人類が安定的な生存は不可能だと放棄している未開拓領域は、ところによっては特殊な資源地でもある。危険を顧みずに主にの冒険者と呼ばれる人々が集まって、高値で売り払える素材や古代遺物を求めている。

人类无法安定地生活而离开的未开拓领域，实际上存在着大量特别的资源。有大量被主赐予了第三身份的称呼的冒险者们不顾危险聚集于此，只为了找到那些价值连城的材料或者古代遗物。

#　一獲千金をって探索をしている彼らは、時に非合法の物品をも流通させる。

有的时候还会有非法的物品流通于这些为了一夜暴富而执着地探索着的这群人之中。

#　サハラたちに協力した寡黙な技師は、怪しい商売に半身が浸かっている人間だ。管理体制の目をかいくぐる未開拓領域までの流通経路を使える立場にいた。

那个帮助了撒赫菈两人的沉默寡言的魔导技师，就是已经半身踏入这种非法交易的人了。也是要使用流通线路前往没有第一身份管制的未开拓领域的人。

#『』や『』総督が北大陸に入り込んだとあってからテロリスト注意の通告はされているが、非合法な物品を運ぶ流通経路が荷物を一つ一つチェックしていくはずもない。そもそもこの貨物列車は、なんとかして点検の目をくぐり抜けて運行しているのだ。

『阳炎的后继』和『第四』的总督来到北大陆的时候，第一身份就发布了注意恐怖分子的通告。但这条运输非法物品的线路，自然是不可能逐个检查货物。更何况这条货运列车，无论怎样都会通过检查，顺利开动的。

#　そのうちの荷物の一つが、内側からガタン、と揺れる。

在这些货物之中，在车厢里面突然动了起来。

#「よいしょ、っと」

「嘿呦，好」

#　木箱の内から現れたのは、やかにウェーブのかかった銀髪の持ち主、サハラである。かくまってくれた工房から出荷される荷物の一つを二重底にしてなんとか入り込んだが、さすがに狭い。解放感に、ぷはぁと息を吐く。

木箱之中出现的是有着一头柔顺的波浪银发的撒赫菈。工坊中搬运而出的许多货箱中有一个有着魔导技师做的暗格，撒赫菈占据了那个狭小暗格的所有空间。撒赫菈探出头来，享受着解放的感觉，呼了口气。

#「人は……いないわね」

「这里……没有别人呢」

#　貨物列車に積まれた木製コンテナの内部だが、技師が気を使ったのか、そもそも荷物が少ないのか、幸いスペースはある。

虽然在堆满木质货物的车厢内部，不知道是技师有意还是本就没什么货物，空间还有许多。

#　半ば禁制品を積んでいる貨物列車だということもあって、環境は悪い。空気が埃っぽく、椅子もないせいで線路からの振動が直接体に響く。木組みのコンテナ壁も、荷物が落ちなければいいという造りの悪さでが入り放題だ。

这个堆积着半数都是违禁品的货运列车，环境也很差。空中漂浮着灰尘，无椅子可坐只能坐在地上感受着列车传递到身上的震动。木制的车厢壁恐怕是只追求货物不会掉落就行，四处都是裂隙，到处漏风。

#　この環境で半日を過ごすのは地味につらい。一度、荷物の積み替えがあるらしいが、積み替えた先もどうせ似たような環境に決まっている。サハラは積まれている荷物の中から拝借した暖導器を作動させて、とんとん、と自分の影をたたく。

这样子度过半天也实在难受。好像中途还有一次换乘，但换乘之后的环境大概和现在也差不多。撒赫菈启动了自己从堆积的货物中找到的制暖导器，然后咚咚地敲了敲自己的影子。

#「成功。あとは凍死しないように注意しないとね」

「成功。之后就是注意不要把自己冻死了呢」

#　サハラの影から、幼女がいした。木箱に入れるスペースが一人分だったのだ。

一个幼女从撒赫菈的影子里爬了出来。木箱里面的空间刚好有一人份。

#「なに。嫌味？」

「什么。不喜欢？」

#　聞きとがめたマヤは、むくれ顔でそっぽを向く。

摩耶听到责难，绷着脸看向别处。

#「よかったわね、サハラはまだ温感があって。温かいっていう感覚は気持ちいいもの。じっくり味わったらどうかしら？　あたしよりずっと人に近くていいんじゃないの？」

「真好呢，撒赫菈还能感觉到冷暖。温暖是种舒服的感觉。仔细感受的话是什么样？比我更能感觉到自己还是人对吧？」

#　マヤはあからさまにねていた。言葉尻をえてちくちくと嫌味を口にする彼女に、サハラはとして口を閉ざしてしまう。

摩耶抓到撒赫菈的话柄之后，丝毫不用掩饰自己正在闹别扭的心情。撒赫菈倒没和这样的摩耶像口角。

#　かくまってもらっていた工房でマヤが感情をさせてから、二人の間には気まずい空気が流れていた。

自从摩耶在她们躲藏的工坊发泄了感情之后，两个人之间的气氛就一直这么尴尬。

#　自分の弱さをむき出しにしてしまったマヤが自分からなな態度をすことはない。彼女の態度は千年の断絶からの孤独に対する防衛反応に近いのだ。自分を守るための言動を他人のために解除するには、マヤは幼過ぎた。

赤裸裸地表现出自己的弱小的摩耶，并没有改变自己顽固的态度。她的心态更像是对千年来从未断绝的孤独的自我防护。为了他人而放弃保护自己，对摩耶来说还是太早了。

#　だがそんな機微を解きほぐせるほどサハラは他人に気を使ったことなどない。マヤが怒っているのはわかるが原因までは汲み取れず、「面倒くさい」の一言で放置したくなってしまう。

但撒赫菈还从没对别人关心到让她能意识到别人的这种微妙感情的程度。只知道摩耶生气了，却不愿了解其中缘由。只说一句「真麻烦」就把摩耶放到一边去了。

#　結果としてサハラとを抱えて背中を向けるマヤとで、無言の時間が流れる。

结果两个人都双手抱膝背对背而坐。让时间随着沉默一同流逝。

#　こういう時にどうすればいいのか。やはりサハラにはわからない。移動時間は、これから半日。この気まずい空間はつらいと、内心でげんなりした。

这种时候该做点什么好呢？对撒赫菈来说果然是毫无头绪。然而自己还要在这里待上半天。撒赫菈心里对这块尴尬的地方既厌恶，又腻烦。

#

#　どれだけ、列車に揺られていただろうか。

不管怎样，就先随着列车这样摇摇晃晃吧。

#　列車が徐々に減速していくのを感じて、サハラは目を覚ました。サハラとマヤはほとんど会話のないまま過ごしていた。昼に出発して、いまは夜だ。マヤはうつらうつらと船をこいでいる。

感觉到列车在慢慢地减速，撒赫菈睁开了眼睛。撒赫菈和摩耶到现在也还是一句话都没说过。出发时还是清晨，而现在已经入夜。摩耶则还在摇摇晃晃地打着摆子。

#　列車が、止まった。

列车停了下来。

#　荷物の積み替え場所だ。がくん、と揺れた車両にマヤが目を覚ます。ぱちぱちと瞬きをしてから、サハラを見る。目線が合って、数秒。ケンカ中であることを思い出したのか、慌てて目をそらした。

到了转运货物的地方了。摩耶也随着停车的晃动醒了过来。眨巴眨巴眼睛之后看向了撒赫菈。视线相交的几秒之后，似乎突然想起来两人之间还在吵架，忙不迭地又看向了别处。

#　弱いくせに強情な態度にイラっとしつつも、サハラは壁のから外の様子をうかがう。しばらくすれば荷物の積み替えが始まるだろう。コンテナごと入れ替えるとは聞いていたが、一応、木箱の中に戻ったほうがいい。

撒赫菈没把摩耶这种能力不强却十分固执的态度放在心上，透过车厢壁的裂缝看了看外面的样子。看来货物的转运很快就要开始了。从听到的即将要换装货物的声音来看，应该还是回到箱子里比较好。

#「……ん？」

「……嗯？」

#　荷物に紛れようと腰を上げたところで、車外で騒ぎがした。耳を澄ませると、誰かが押し問答をしているようだ。

正当撒赫菈起身准备钻回箱子里的时候，车厢外面传来了些许骚动。听起来似乎是有什么人在争吵。

#　もしや、追っ手か。

万一，是追兵的话。

#　どうするべきか、サハラはする。事情を察したらしいマヤは硬直している。

撒赫菈在思考着接下来该怎么办。而摩耶似乎也察觉到了什么，紧张了起来。

#　ここから逃げ出したら、今度こそハクアとの約束の日時には間に合わない。かといって追っ手と戦ったところで、なんの解決にもならない。敵を退けたところで、不正乗車が明らかになれば貨物列車がサハラたちを乗せて運んでくれるはずがないのだ。

如果就这样逃走的话，那就指定是再也赶不上和白亚约定的见面时间了。但要是说和追兵开战的话，实际上也什么都解决不了。等击退敌人之后，同时撒赫菈两人偷偷乘上这趟货车的事情也会暴露。肯定是不会再让撒赫菈和摩耶继续乘车的了。

#　木箱に隠れて、通り過ぎてくれることを天に祈るしかないのか。

大概就只能躲在木箱里，祈求能够顺利通过这里了吧。

#　運任せ以外に思い浮かぶことがなかったサハラのに、ふと別の案がよぎった。

撒赫菈除了碰运气之外没有任何想法的脑海中，突然闪过了一个念头。

#　自分がオトリになれば、どうだ？

要是把自己当成诱饵的话，会怎样？

#　それは、意外に名案である気がした。

这似乎意外地是个好主意。

#　ここでサハラがわざと発見される立ち回りをすれば、陽動として申し分のない活躍をできる。裏事情を知らない人間は、マヤよりもサハラを重視している。マヤが異世界人だということを知らないし、ましてや四大『』から復活した稀少な存在であることなど、なおさらだ。

如果撒哈拉现在采取故意被发现的方法，就能作为佯攻就能发挥巨大的作用。不知道内情的人，相比摩耶，肯定是更重视撒赫菈。很多人连摩耶是异世界人的事情都不知道，那要是提起她是从四大人灾『万魔殿』中复活的人就更是稀少了。

#　マヤをここに置いて、貨物の積み替えが終わるまでサハラが追っ手を釣り出せばいい。最悪、捕まったところでサハラがマヤのことを自白しなければ、彼女は目的を果たすことができる。

撒赫菈只要把摩耶留在这里，然后引开追兵直到货物转运完成就行了。就算自己不幸被捕，只要不交代摩耶的事情，摩耶也能完成自己的目标。

#　そこまで考えてから、首をひねる。

撒赫菈想到这里，歪了歪头。

#「……いや、なんで？」

「……算了，凭什么？」

#　自分で自分に問いかけて、バカらしいと一笑に付す。

撒赫菈这样问了问自己，把自己给蠢笑了。

#　なんで自分が、そんなことを提案しなければならないのか。マヤからいで強要されての命令ならまだしも、自主的に自分が犠牲になる提案をするなど、意味がわからない。そもそもマヤは間違いなくされている。ここで足止めを食らったほうが、彼女のためですらある。

为什么自己就非得要做这种事？若是摩耶利用诅咒下达的命令也就算了，撒赫菈觉得自己主动去做这种自我牺牲的计划，根本没什么意义。更何况摩耶明明就是被骗了。要是<闹剧>被迫止步于此，对她也好。

#　なにより、サハラは死にたくない。傷つきたくない。自分が一番大事だ。それが間違っていると思ったこともない。

总的来说，撒赫菈并不想死。受伤都不想受伤。自己才是最重要的。这样想就绝不会错。

#　だって、生き残って強くなれば。

因为，活下来才能变得更强。

#　メノウみたいに、で、他人のために行動できるようになるんじゃないかって──

像梅诺那样，能够为了他人而行动的样子不是很耀眼吗？什么的——

#「──バカらしい」

「——像个笨蛋」

#　首を振って、頭によぎった考えをふるい落とす。

摇摇头，把脑海中闪过的念头抹去。

#　結局、そんなことはできないからこその、ないものねだりなのだ。あの砂漠でメノウと戦って、なすすべもなく負けて、わかった。

说到底，正是因为自己做不到才会强求。撒赫菈在那片沙漠里与梅诺战斗，最终毫无悬念地失败之后才明白。

#　サハラは死んだって、メノウのような綺麗な人間になれない。

她即使是死，也无法成为像梅诺那样耀眼的人。

#　人には分際というものがあるのだ。サハラは、視線を落とす。

人与人之间总会存在着差距。撒赫菈垂下视线。

#　そこには、小さな子供が震えていた。

在那里，有一个小孩子在颤抖。

#　誰にも心を明かせず、頼れるものもないから虚勢を張ることしかできず、なにかを突き通す強さがないことを嘆いているのに、自分を主張するためには弱さを振りかざすしかない。

与谁都不交心。无人依靠只能自己虚张声势。明明因自己什么都做不到的弱小而叹息，却还不得不为了自己而向别人展示弱小。

#　そんな子供が、いた。

这样的孩子，就在眼前。

#　──……必要と、されたい。

——……想要有人珍视自己。

#　一度だけ心の弱さをむき出しにした声が、なぜかサハラの脳裏で再生された。

摩耶仅袒露过一次的脆弱的心声，不知为何兀自在撒赫菈脑海中响起。

#　なにかを考えたわけではなかった。

撒赫菈放弃了思考。

#　サハラは、ふらりと立ち上がる。マヤを置いて、コンテナの扉に手をかける。なにをしている。自分の行動を客観的に見て制止しようとする自分がいた。明らかに理性の言っていることが正しいのに、サハラの動きは止まらなかった。

突然站了起来。让摩耶留在这里，而她自己则把手搭上了车厢的门。要做点干什么。自己的理智想要从客观的角度制止自己的行动。虽然遵循理智的想法显然更加正确，但撒赫菈也没停下来。

#「……さ、サハラ？」

「……撒，撒赫菈？」

#　ひどい顔をしたマヤがか細い声を振り絞る。その表情に、見捨てられるとのではという恐怖がありありと出ていて、サハラはちょっとムッとした。

摩耶带着十分畏缩的表情挤出细小的声音。撒赫菈从那样的表情中清晰地感受到了摩耶对被抛弃的恐惧，感到有些好气又好笑。

#「どこ、行く気……？」

「你要，去哪……？」

#「え？　ああ、うん。ちょっと、その……」

「诶？啊——，嗯。稍微，那个……」

#　うまい言い訳が思い浮かばなかった。マヤのために自分がオトリになろうとしているだなんて言っても、信じられないだろう。なにせサハラ自身が自分で信じていないのだ。

完全想不到一个好借口。自己打算为了摩耶去引开追兵这种话就连撒赫菈自己都无法信服。即使是算说出来，摩耶也更是不可能相信的吧。

#　だから、とっさに答える。

因此，撒赫菈立刻就这样回答了。

#「と、トイレに行ってくる」

「我，我去趟厕所」

#「は？」

「啊？」

#　予想外のにマヤが言葉を失う。なに言ってんだこいつという幼女の表情に、言い訳にしてももうちょっとなにかあっただろうと自己嫌悪に襲われた。

摩耶听到意料之外的回应，说不出话来。看到摩耶脸上「这家伙在说什么东西」的表情，撒赫菈开始觉得觉得就算是借口，自己也应该找个更好点的。不禁自责了一下。

#　格好をつけることすらままならない。

就连装模作样都不行。

#　なりたい自分になれない自分にちょっぴり絶望して肩を落としながら、サハラは追手がいるだろう外へつながるコンテナの扉を開けた。

明知自己无法成为自己想要成为的那个人，撒赫菈带着少许绝望沉下肩膀，随后推开了通往或许有着追兵的外面的车门。

#

#　導力光のが、うっそうとした林の中で帯を引いていた。

导力的磷光，在这片葱郁的树林中拉出一条光带。

#　空で白い光を放つ『』の導力光をる雑木林の中。光の発生源は、くも美しいクリーム色の髪を黒いスカーフリボンでくくった少女だ。導力を肉体にまとうことで身体能力を上げて駆け抜ける彼女の軌跡は、暗い林の中ではよく目立つ。

在这个能遮蔽天空中放出白色导力光的『星骸』的杂木林中。光线的源头来自于如一位用黑色丝带扎起栗色头发的如梦一般美丽的少女。因为使用导力包覆与身体上而提高了身体机能，她穿过树林的轨迹在这个昏暗的树林里十分显眼。

#　光に羽虫が引かれるように、彼女のことを神官服の集団が追っていた。

有许多身穿神官服的人就像被光线吸引的飞虫一般，紧随于这位少女身后。

#　全員が処刑人だ。ほとんどが藍色の神官服。魔導行使者として認められただ。『』の呼びかけに賛同した彼女たちは、教典の通信魔導で受け取った情報をもとに、指名手配された目の前の少女に襲いかかっていた。

全员都是处刑人。且全都身穿对她们身为魔导行使者的能力的认可的蓝色神官服。认同『教官』的号召的她们，根据教典的通信魔导得到的情报，前来追击眼前这个被通缉的少女。

#　雪に足を取られるような未熟者が、一人としていない高度な多対一。しかし精鋭の魔導行使者たちが、一人を相手に劣勢になっていた。

她这样看起来步履蹒跚的年轻人，应对着她一个人绝不可能生还的围攻。然而这群精锐的魔导行使者们，却因她而陷入了劣势。

#「くそっ、ここまで強かったのか……！」

「可恶，怎么会这么难缠……！」

#　紋章魔導は弾かれ、教典魔導はかわされる。動きが圧倒的すぎて、人間を相手にしている気がしなかった。

她能弹开纹章魔导，躲避教典魔导。战斗的技术过于强大，以至于处刑人们甚至不觉得自己在与人类作战。

#　とにかく動きの次元が違う。ここまで圧倒的な導力強化の出力があったのか。予想外の強さに顔をゆがめながらも、そろそろ雑木林を抜ける。一人が左手に持つ教典に導力を流して、教典魔導を発動させた。

她做出的动作与己方不在一个层次。竟能输出这样巨大的导力进行导力强化？虽然敌人的能力超出预期，十分难缠。但她也差不多要离开杂木林了。处刑人中有一个人将导力注入左手的教典中，发动了教典魔导。

#『導力：接続──教典・一章四節──発動【主の御心は天地に通じ、千里のかなたまで征く】』

『导力：接续——教典·一章四节——发动【主之心贯通天地，远达千里彼端】』

#　神官が持つ教典魔導の一つ、通信魔導だ。同調した教典と連絡が取れるこの魔導があればこそ、離れた場所にいる仲間と綿密な連携が取れる。

神官拥有的教典魔导之一，通信魔导。只要有这个魔导，就可以与进行过同步的教典取得联络，即使不在同一场所也可以保持有效率的情报交流。

#　見晴らしがよくなったところで、勝負を仕掛ける。無言のまま、教典の通信魔導で意思を共有しようとした時だ。

等来到开阔地带再一决胜负。就在默默地通过教典魔导传递计划的时候。

#　ぐるん、と『』が方向転換をした。

『阳炎的后继』却突然一转方向。

#「──!?」

「——！？」

#　不意に小さく飛び跳ねて、近くの木の幹を足場にして蹴り上げる。樹木が盛大に揺れ、雪が落ちる。ほぼ百八十度の急転換に、背後を追っていた神官が身をすくめた。

她突然小小地跳起，继而利用近处的树干当作跳板跃起。树木剧烈地晃动，积雪纷纷落下。看到她突然间180°的转向，在她身后追击的神官畏缩了一下身体。

#　ほんの一瞬の硬直だったが、致命的なには変わりない。『』のが叩きまれる。

不过是一瞬间的迟钝，也不能改变这是个致命的空档的事实。神官旋即被『阳炎的后继』挥来的拳头击中。

#「ぐぁ!?」

「咕啊！？」

#　悲鳴が上がり、また一人、神官が脱落する。すでに十人以上の神官が倒されている。数の差は圧倒的だというのに、戦闘能力の差は歴然としていた。

随着惨叫响起，又是一位神官无法战斗。现在已有十名以上的神官被击倒。神官们拥有压倒性的人数优势，但她们与敌人的战斗能力的差距却不言而喻。

#「くるぞ！」

「要来了！」

#　一人が叫んだ。

她独自高喝。

#　次の瞬間、『』がぐんっと加速して迫る。『』の全身が淡く青の導力光をまとっている彼女の速度は神官たちの予想を上回った。木々の幹を足場にした動きの読めない立体軌道でヒット＆アウェイを繰り返した彼女の拳が、最後の一人を打倒する。

话音刚落，全身缠绕着淡淡的青色导力光的『阳炎的后继』猛地加速接近。她的速度超出了神官们的想象。同时还利用树干作为跳板，在空中跳跃出无法预判的轨迹。再利用着一击即走的游击战术，仅拳头击败了最后一人。

#「ふう」

「呼」

#　追っ手をりちにした彼女は一息ついた。どんな身体能力なのか、息切れ一つしていない。

反过来击败全部追兵的她吐出一口气。不知她有怎样的身体能力，甚至喘息都没有。

#　彼女はいま、単独行動をしていた。

现在的她，正独自行动着。

#　騎士たちを倒してマヤたちの居場所を補足したメノウたちは二手に分かれたのだ。片方はマヤが目的地としている指定されていた『遺跡街』の入り口に、片方はそのままマヤとサハラの現在地を目指して行動している。

击败了骑士们，得知了摩耶二人所在之处的梅诺两人分头行动了。一人前往摩耶的目的地『遗迹街』的入口，另一人就这样前往摩耶和撒赫菈现在的所在地。

#　そしてサハラたちと合流しようとしていたところを、処刑人たちに待ち伏せされていた。

然后在正准备与撒赫菈汇合的时候，被等在那边的处刑人伏击了。

#　だがそれはメノウの予想通りでもあった。事前に聞いていたこともあって、ほとんどの追手は返り討ちにしたはずだ。

但这种事情早在梅诺的计划之中。因为事前就听说了这个事情，反而慢慢地把追兵一个个击败了。

#「さて……早く合流しないと」

「那么……要赶紧和撒赫菈她们汇合了」

#　栗色のポニーテールをひるがえし、息一つ乱さずに再び駆け出す。

栗色的马尾辫飘动，梅诺再次气息稳定地跑了起来。

#　雑木林が開けた先に、敷設された線路が伸びていた。この先にある停車場にマヤたちがいるはずだ。

杂木林前，有一条线路铺设于此处延伸向远方。摩耶她们应该就在前方的车站。

#　だが。

但是

#　月光を白く照り返す雪原で、彼女は足を止めた。

梅诺驻足于这片反射着白色月光的雪原上。

#「……やっぱり」

「……果然」

#　そこには、彼女の予想していた通りの相手がいた。

雪原中出现的对手在一个梅诺意料之中。

#　メノウたちの居場所を正確にとらえて送り込まれてくる追っ手の動きには、目的の場所に動かすための意図が見え透いていた。

从神官们正确地追来了梅诺身处的地方就能看得出来，她们已经完全看透了自己前往目的地而行动的意图。

#　予想していたのに、避けることができなかった。彼女は一刻も早くサハラたちと合流することを優先したからだ。

虽然早已预料到了，但却没办法避开。因为梅诺把尽早与撒赫菈两人汇合作为最优先的事情。

#　苦々しい視線の先には一人の女性がいた。

苦涩的视线投向眼前的女性。

#「……さっきの処刑人を扇動したのは、あなたね」

「……煽动刚刚那些处刑人的，就是你吧」

#「ああ、そうだ」

「啊啊，是啊」

#　ここで待ち構えていた敵。

等待在这里的敌人。

#　最強の異端審問官であるミシェルはあっさりといた。

最强得以短审问官米歇尔切实地颔首赞同。

#「私への反発をげて集まった愚か者どもに、貴様の居場所の情報を流した。貴様らの消耗を誘い、同時に反乱分子も一掃できる。独断専行の末に返り討ちにされた愚か者に同情するものもいなかろう。これにより、私に反抗する者も減ることになる」

「我把你的位置告诉了这群为了反对我而聚在一起的蠢货。这样又能让你陷入战斗，也能清扫反乱分子。单靠自己的独断专行，结果被反杀的蠢货根本不值得同情对吧。这样一来，反对我的人就减少了」

#「あなたみたいな年上に使いつぶされた子たちがでならないわね」

「被像你这样的老油条利用的孩子们真可怜」

#「くだらん。分際をわきまえぬ無能に、これ以上の使い道があるのか？」

「无聊。这些拿不定轻重的无能之人，难道还有更好的用处？」

#　ミシェルが大剣を片手で持ち上げる。雪が舞い散り、彼女の発する導力光を反射して輝く。

米歇尔单手举起大剑。四散的雪花因为反射出她身上的导力光而闪烁。

#　強力な武器である教典はないものの、それでも彼女の構えた姿の威圧感は先ほどまで襲い掛かってきた神官たちとは隔絶している。

既没有强大的武器也没有教典，然而从她摆出的架势中散发出的压力却远远超过先前追击梅诺的神官们。

#「おしゃべりはおしまいだ、『』。ここを貴様の終点としよう」

「闲聊就此结束，『阳炎的后继』。你就止步于此吧」

#　最強の【】にして【魔法使い】。

最强的【使徒】，【魔法使】

#　ハクアに忠誠をささげるミシェルが片目をたわめて言い放った。

对白亚忠心耿耿的米歇尔眯起一侧眼睛，如此宣告。

#

#　に傷がある神官が、貨物列車の停車場を歩いていた。

脸上带伤的神官，正在步行穿过货运列车的车站。

#　ここは主に『遺跡街』から採取された資材か、逆に『遺跡街』に挑む冒険者たちのための物品置き場として使われている。各所に木製のコンテナが置かれ、積み上げられた荷物の間が小道になっている。列車で運ばれたコンテナは、外骨格の導力強化装甲を操作する搭乗者が運んで指定の場所に移動させていた。

这里主要用于放置从『遗迹街』采集来的材料，同时也是向『遗迹街』进发的冒险者们放置物品的地方。四处堆积着的木质集装箱和小山一样的货物之间仅有一条小路。通过列车运达此地的集装箱，由工作人员操作外骨骼导力强化装甲上的转运到指定地点。

#『』は自分に賛同する処刑人たちを集めて、独自の部隊を編制した。ミシェルに先んじて『』を発見することができた。

『教官』聚集起愿与自己一起的处刑人，编制成一个独立的部队。因此得以先于米歇尔发现『阳炎的后继』的行踪。

#　二手に分かれたのか、同行しているという原色知性体の姿もない。『』は単独行動をしている。遠くで集めた仲間たちが戦っている姿が、よく見える。望遠鏡でもかねば見えないはずの位置にいる相手の姿がはっきりと映っている。

是分头行动了吗，梅诺身边没有与她同行的原色知性体的身影。『阳炎的后继』正在独自行动中。自己能清晰地看到远处的集结的神官们战斗的状态。用上望远镜，就可以清晰地看到本看不清的远处的敌人的样子。

#　自分が全盛期になったからだ。『』は疑いなく、自分の状態を信じ切っていた。

毕竟自己已经回到了全盛时期。『教官』毫无疑问，对自己的状态深信不疑。

#　だが、それだけでは足りない。

但是，仅仅是这样还不够。

#『』たちにメノウたちの居場所を情報提供していた緑髪で眼鏡をかけた神官は、襲撃には参加することなく、いま、連絡が途絶えた。

向『教官』们提供了梅诺等人的所在地的情报的绿头发戴眼镜的神官，没有参与对梅诺的追击。甚至现在已经与她们断绝了联系。

#「やはり……スパイか……」

「果然……是间谍吗……」

#　直属部隊に引き抜かれながら、ミシェルの采配が不服だとして近づいてきた神官、フーズヤード。日ごろ、ミシェルには強く当たられていた様子もあった。異端審問官なんてやりたくないんだという訴えも噓にも見えなかった。地脈に己の精神を没入させる儀式魔導で感知を続けた彼女からもたらされる情報は最後まで正確だった。

芙兹雅德被编入米歇尔的直属部队，但似乎对米歇尔的指挥不服而接近了『教官』。平日里米歇尔似乎对她很不客气。她既没有说不想当异端审问官，也没有提供假情报。她能够通过把自己的精神潜入地脉中的仪式魔导，不断地利用地脉进行感知，获得正确的情报。

#　ミシェルたちは『』たちを騙すことなどせず、情報を流すことで捨て駒にして『』を消耗させ、自分がとどめを刺すつもりなのだ。

米歇尔们没有欺骗『教官』，而是利用泄露情报，让这些弃子们消耗『阳炎的后继』，而由自己来亲自刺杀她。

#「ふざけたことを……」

「开什么玩笑……」

#　自分たちを手のひらの上で動かしている気になっている。敵は『』だけではない。ミシェルも、自分の敵だ。

搞得好像自己这群人都在她们的计划之中一样。敌人不止是『阳炎的后继』。米歇尔也是自己的敌人。

#　途中まではミシェルの思い通りに動いてやろう。集めた仲間を犠牲にして、思惑通りに捨て駒になったふりをして、『』とミシェルを争わせる。

直到中途都按照米歇尔的想法进行吧。牺牲聚集起来的同伴，顺着她的思路当成弃子，最后让『阳炎的后继』与米歇尔正面遭遇。

#　そして残ったほうを自分が討つのだ。

然后活下来的那一方就由自己来杀死。

#「処刑人は、独立した存在だ……お前の思い通りになるとォ？」

「处刑人，是独立的存在……这如你所愿了吗？」

#　ミシェルと『』がつぶし合っている間に、自分はもう一つの成果を上げればいい。『』総督ともなれば、処刑人の成果として十分な相手だった。サハラの居場所は、どうしてか、第六感ともいうべき感覚で察知することができた。それは『』を蝕む原罪概念が同じ場所にいるマヤに引き寄せられているだけなのだが、彼女にその自覚は一切ない。

趁着米歇尔和『阳炎的后继』正开大的时候，自己要是再取得一份战果就更好了。如果是『第四』的总督，也是足以作为处刑人的战果的对手。不知为何，她能通过自己的第六感察觉到撒赫菈的所在地。然而这只不过是侵蚀着『教官』的原罪概念被与撒赫菈一同行动的摩耶所吸引的表现。但『教官』对这一切都一无所知。

#「おい、あんた。ここは関係者以外、立ち入り禁止だよ」

「喂，那边那个。无关人等，禁止入内」

#　資材置き場の奥深くに無断で踏み入った『』を数人の男たちが見咎めた。警備にやとわれているのか、見るからに荒事に慣れた冒険者崩れだ。あるいは、不法流通に与している現役冒険者の可能性もある。

『教官』擅自深入仓库的行为被几个男人发现了。或许是雇佣的警卫，一眼就能看出来曾是习惯粗犷动作的冒险者。或者说，也有可能是参与到不法物品的流通中的现役冒险者。

#　彼らは『』のローブからのぞく神官服に、警戒の視線を向ける。

他们警惕地看着从『教官』的长袍下露出的神官服。

#「いくらでも、事前の許可がなければ──ぁ？」

「就算是第一身份，没有提前得到许可的话——？」

#『』はなくレイピアを引き抜き、男の心臓を突き刺した。自分の胸に刺さったレイピアに、彼は信じられないという表情を浮かべる。

『教官』没有丝毫犹豫，挥动单手刺剑刺向男人的心脏。男人看着没入胸口的刺剑，脸上露出难以置信的表情。

#　刃を引き抜くのに合わせて、ゆっくりと男が倒れた。

随着剑刃拔出，男人也随之倒地。

#『』が顔を上げた。邪魔をするものは、殺す。それが処刑人だ。

『教官』抬起头。抹杀碍事者。这才是处刑人。

#『導力：接続 ──細剣・紋章 ──発動【刺突：拡張】』

『导力：接续——细剑·纹章——发动【突刺：扩张】』

#　続けざまに放たれた紋章魔導が、もう一人のに穴を開ける。奇妙なほど誰も声を上げない静寂の中で、どうっと男の体が地に落ちる。

被连续放出的纹章魔导，在另一个人的额头上开出一个洞。神奇的是，在一片谁都没有出声的静寂中，男人的身体倒向了地上。

#「どけ……さもなくば、死ね」

「滚开……要么就死吧」

#　悲鳴が、はじけた。

惨叫声，喷薄而出。

#

#　サハラがコンテナの外に出たのと悲鳴が上がったのはほとんど同時だった。

撒赫菈来到车厢外的同时，也听到了别处传来的惨叫。

#「……んん？」

「……嗯嗯？」

#　サハラは小首を傾げる。自分たちが見つかる前に非合法の品でも見つかったのかもと思ったが、騒ぎの質が違う。わずかに、地響きがしている。「なんでッ」「応援を──」「いや、逃げろっ」などという声が聞こえては、途切れていく。情報が錯綜してあわただしくなる周囲の音と、足元から伝わる振動が近づいてくる。

撒赫菈感到有些疑惑。本以为可能是在自己之前就有非法品被找到，但现在和骚动有些不同。地面在微微震动着。「什么东西」「叫支援——」「别，快逃」之类的声音不绝于耳。随着杂乱的消息和周围慌乱的声音，脚边传来的震动也越来越近。

#　断続的な地響きが、少しずつ近づいてくる。一体なにが、と振動の方向に目を向けた。

地面上的震动断断续续，却在稳步地慢慢靠近。撒赫菈一边想着到底发生了什么，看向了震动传来的方向。

#『導力：接続──教典・三章一節──発動【襲い来る敵対者は聞いた、鳴り響く鐘の音を】』

『导力：接续——教典·三章一节——发动【尔袭来之敌已倾听，此响彻于耳之钟鸣】』

#　導力光の鐘が鳴り響き、サハラたちが乗っていた貨物列車の先頭車両が吹き飛ばされた。

导力光形成的钟响起钟鸣，撒赫菈和摩耶乘坐的货运列车的牵引车头被吹飞了。

#　教典魔導だ。警告なしの攻撃に、サハラは絶句する。真っ先に移動手段である導力列車の機関車両をしてきた。

是教典魔导。撒赫菈对这毫无警告的攻击哑口无言。首先就将作为交通工具的导力列车的牵引车头破坏。

#　音響攻撃を打ち鳴らす導力の鐘が消え去るタイミングで現れたのは神官だ。神官服の色は藍色。の線の色からして、神官の中でも司祭相当の実力者であることがわかる。

放出声波攻击的导力钟消散，随后神官现出身形。身着蓝色的神官服。从胸前系起的线的颜色来看，来者在神官中也是达到了祭司水平的人。

#　追手の襲撃だ。どうやったか知らないがピンポイントでサハラたちがいる場所を当ててきた。

是追兵的袭击。不知道她做了什么能够这么精确地找到撒赫菈两人所在的地方。

#「サハラ……貴様、一人か？　いや……やはり、もう一人、禁忌が、『』の小指、がいるな……」

「撒赫菈，只有，你一个人？不……果然，还有一个人，禁忌的『万魔殿』的小指，也在啊……」

#　サハラを視認した神官がローブを脱ぎ捨てた。

看着撒赫菈的神官脱下了身上的长袍。

#　に傷がある彼女の顔には見覚えがある。

神官脸上的伤口牵动了撒赫菈的记忆。

#「……『』？」

「……『教官』？」

#　修道院時代の指導神官の筆頭だ。

修道院时代的的指导神官的领头人。

#　だがサハラの記憶にある彼女から変わり果てている。神官服から伸びる手足の地肌に目玉や耳穴ができ、背中は凸凹と不自然に隆起している。ローブを着ていた時にはかろうじてごまかせていた異常性があらわになっていた。

但她已经与撒赫菈记忆之中的样子大相径庭。从神官服中伸出的手脚的皮肤上遍布眼球和孔洞，背后也有许多不自然的凹凸起伏。穿着长袍时还能掩盖的身上的异常，如今暴露无遗。

#「なに？　イメチェン？　趣味は人それぞれだから、私は否定しないわ」

「这什么？改头换面了？但毕竟人的兴趣总是各种各样，我也没法否认啦」

#「ああ。貴様も『』をかばい立てするか」

「啊啊。你也要袒护『阳炎的后继』是吧」

#　会話が成り立っていない返答をされた。

得到的回答完全不在一个频道上。

#　明らかに原罪概念に精神を浸食されて、正気を失っている。サハラは慎重に問いかける。

很显然是被原罪概念侵蚀了精神，正在失去理智。撒赫菈小心地提问。

#「なんのこと？　メノウをかばったことなんて、一度としてない。メノウを売れば助けてくれるなら、喜んで売るけど？」

「你说什么？袒护梅诺这种事，我可是一次都没做过。要是拿梅诺交易之后能换得帮助，那我很乐意把梅诺给你哦？」

#　マヤに召喚されて北に来たサハラは、いまのメノウの居場所を知らないのだが、相手はそう思ってくれなかった。

被摩耶召唤到北方的撒赫菈，根本不知道梅诺现在在哪里。但对方似乎并不这么想。

#「……『』総督、サハラ。貴様と『』は、同時期に修道院に入っていたな」

「……『第四』总督，撒赫菈。你和『阳炎的后继』是同一时期进入修道院的吧」

#「同時期っていっても、一年も一緒にいなかったけどね」

「虽说是同时期，但在一起的时间一年都不够呢」

#　サハラと同期の処刑人候補はメノウの要望によって解放された。あの修道院に残ったのは、モモや他のごく一部の例外だけだ。サハラも自分の才能に見切りをつけて、普通の神官になるべく地方で修道女をしていた。

撒赫菈还有其他同期的处刑人候补都因为梅诺的愿望得到解放。留在那个修道院的，只剩下茉茉还有其他极少一部分人。撒赫菈也放弃了发掘自己的才能，在培养普通的神官的教堂担任修道女。

#　だがに当時を知るからこそ、『』には不審なラインが見えてしまったようだ。

似乎是因为对当时的情况一知半解，『教官』从中发现了什么可疑的线索。

#「そのから共謀していたのか？」

「从那个时候开始就已经一起谋划了？」

#「してない。深読みは止めてくれない？」

「根本没有。您的过度解读可以停停吗？」

#　きっぱりと否定する。サハラにとってみれば迷惑まりない勘違いだった。

干脆地否定了『教官』的疑问。从撒赫菈的角度看，这样的提问离谱到了极点。

#「昔からメノウとは普通に仲が悪かった。思い出のには断固反対」

「我一直以来和梅诺的关系就不怎么好。坚决反对你随意捏造过去的事情」

#「『』が修道院を去る際に資料を焼却していたが……それでもわかることがある」

「『阳炎的后继』在离开修道院的时候把自己的资料全部烧毁了……即使如此有的事情也很明确」

#　サハラの言葉を無視して『』が全身の目をぎらつかせる。

『教官』无视撒赫菈的话，全身的眼睛都睁圆了。

#「調べた限りでは貴様の訓練成績が低迷すると同時に、『』は頭角を現していった。なにか二人の間で取り決めがあったのか？」

「调查发现你的训练成绩陷入低迷的同时，『阳炎的后继』刚好开始崭露头角。你们两人之间做了什么决定？」

#「いや……なにもないんだけど……」

「哎呀……都说了什么都没有……」

#　単純に、早熟気味だったサハラの成長が早々に止まっただけである。それに反して『』直々に訓練を受けたメノウがめきめきと実力を伸ばしていったのだ。悲しい思い出をらないで欲しい。

这缘由，单纯就是撒赫菈发育得早，结束得也早而已。但另一边，梅诺却得到『阳炎』的亲自训练和指导，实力迅速地增长了。撒赫菈真心希望『教官』不要继续揭开自己那些难过的回忆。

#「答えない、か。聖地崩壊の折に『』が『』が管理していた修道院の資料を焼いて隠滅しようとした情報は、そのつながりなのだな」

「回答不出来，吗。在圣地消失的那个时候，『阳炎的后继』在『阳炎』所管理的修道院中烧毁的，想要隐藏起来的情报，就这样串连起来了啊」

#「取り決めもないし、そんなつながりもないし、メノウがった相手も違うし？」

「我一没与她做什么约定，二这种因果是不存在的，所谓庇护梅诺的人也更不是我啊？」

#　メノウが隠滅した資料は、モモとの関係である。アカリを預けるにあたって、モモにハクアたちの注意が向かないように、徹底的に記録を抹消した。に戻るモモとのつながりを断つためだったが、あえて自分とサハラとの記録は中途半端に残してモモから意識をそらしたということを、サハラは知るよしもない。

梅诺焚毁的资料上记载的是她与茉茉的关系。为了在把灯里交给茉茉的时候，让白亚等人不再把注意力放在茉茉身上，而彻底抹去了茉茉曾作为自己的处刑人辅佐的记录。但撒赫菈不知道的是，梅诺为了将自己与回到第一身份的茉茉之间的关联彻底切断，特地没有完全销毁自己与撒赫菈的记录，借此减少第一身份对茉茉的关注。

#「『』は処刑人として、そして貴様はただの修道女のふりをして東部未開拓領域でを研ぎ、下地を作り、用意が済むと同時に脱走して合流したというわけだな」

「『阳炎的后继』努力成为处刑人，而你则借修女的名义前往东部未开拓领域磨炼能力，做好铺垫，在准备万全之后就离开东部，两人汇合对吧」

#　相手の脳内で壮大なストーリーができてしまっているが、世界は必然と陰謀でできているわけではないことを思い出してほしい。サハラは、なんか流れと偶然と感情で生きてきたのだ。

『教官』的脑海中一个宏大而长远的阴谋计划逐渐成型，但撒赫菈很想让她知道这个世界并不是全都由必然和阴谋构成的。自己能活到现在，全靠四处漂泊、一些偶然以及对生的执着。

#　おかげで、引き返せないところまで来てしまった感がする。

也得亏这句话，撒赫菈感到『教官』对自己的怀疑已经无法回头了。

#「会話をするのも無駄な気がするけど……『』。原罪概念に手を出したのはともかく……どれだけ、人を食ったの？」

「感觉我说什么都没用……『教官』。暂且不说涉足了原罪概念……您现在已吃了多少人了？」

#「バカにするな……原罪概念だと。誇りある処刑人の私が、そんなものに手を出すかァ！」

「别说胡话了……原罪概念什么。以处刑人为傲的我，怎么会牵扯到那种东西！」

#　突如として、『』の感情が振り切れた。

『教官』突然间激动起来。

#　過敏な反応にぎょっとしつつも、得心がいった。『』には自分の肉体が原罪概念に侵食されて悪魔と化している自覚すらないのだ。

撒赫菈被『教官』过激的反应吓了一跳，但还是反应了过来。『教官』恐怕还没意识到自己的身体已经被原罪概念侵蚀，成了个怪物。

#　彼女は禁忌を狩る処刑人として生きてきた。を生き抜き、処刑人を育てる修道院の指導教官として抜擢されたプライドが、変調した精神といびつにみっている。

她作为生来就只为狩猎禁忌的处刑人长大。从现役中活下来，被提拔成为养育处刑人的修道院的指导教官的荣耀和异常的精神扭曲地纠缠在一起。

#　ぼこり、と背中が隆起した。神官服を突き破って、成人男性ほどの長さがある腕が出てくる。左右にそれぞれ三本の、計六本の巨大な腕だ。人間一人をそのまま腕の形にこねくりまわして子供が雑につぎはぎしたかのような印象を受けるのに、問題なく指先まで動いている。

突然，『教官』的后辈高高隆起。足有成年男性长度的触手突破神官服向外伸出。左右各三根，共计六根巨大的触手。看上去感觉像是小孩子把一个人捏成这种触手形状，再胡乱地拼接起来一样。然而触手却灵活地动了起来。

#「サハラ、なにが──ぅっ」

「撒赫菈，发生什——」

#　隠れていた車両の先頭が吹っ飛ばされたのだ。(サハラが開いたコンテナの扉からおそるおそる顔を出したマヤ)が『』を目にして息を飲む。敵が来たからか、そのグロテスクな見た目にか、はっきりと恐怖の表情を浮かべる。

用于躲藏的列车的车头被吹飞了。摩耶从撒赫菈打开的车厢门口出头来，看到了『教官』，倒吸一口凉气。不知道是看到了敌人，还是『教官』恐怖的外貌，她脸上浮现出恐惧的表情。

#　サハラが硬直していたのは、マヤとは違う理由だ。

而撒赫菈全身僵硬的原因和摩耶不一样。

#『』の背中から生える六本腕の左側の手のひらに、教典が埋め込まれていた。

从『教官』的背后生长而出的六根触手中左侧的三根中，嵌着三本教典。

#「まさか……」

「不会吧……」

#　神官にとって教典は、もっとも強力な武器である。『』のものも含めて、合計四冊。教典魔導を行使する難易度を考えれば、一人で扱えるはずがない。

教典之于神官，是十分强而有力的武器。『教官』算上教官本来就有的那本，她现在拿着四本教典。考虑到行使教典魔导的难度，一个人最多也就使用一本教典才对。

#　だが予想というものは悪いものほど的中する。

但撒赫菈想象中的最坏结果正在变成现实。

#「『』総督に、『』の小指。『』とミシェルの前に、まずは貴様らからだ」

「『第四』总督、『万魔殿』的小指。就让你们在『阳炎的后继』和米歇尔之前先走一步吧」

#『導力：接続──教典・八章十二節──』

『导力：接续——教典·八章十二节——』

#『導力：接続──教典・八章十二節──』

『导力：接续——教典·八章十二节——』

#『導力：接続──教典・八章十二節──』

『导力：接续——教典·八章十二节——』

#　背中から生える腕に埋め込まれた教典が、同時に三つの導力光の光源となる。

镶嵌在背后的触手中的的教典，同时开始散发出导力的光芒。

#「うっそでしょ」

「这真的假的」

#　差し迫る脅威に半ば絶望しつつも、体は反応していた。導力強化の燐光を帯びたサハラは、真っ先にマヤを抱きかかえて跳躍。貨物列車のコンテナの後ろに回って『』の視線を切る。

虽然迫在眉睫的威胁带来十足的绝望，但身体还是做出了反应。撒赫菈身上缠绕上了导力强化的磷光，第一时间抱起摩耶，跳开。回到货运列车的车厢后，避开『教官』的视线。

#『『『発動【正門にけ。門前は主に続く道である】』』』

『『『发动【于正门跪拜吧。门前为通往主的道路】』』』

#　三つの教典魔導が、同時に放たれた。

三个教典魔导，同时施放。

#　三方向、均一な位置に門が形成される。別方向に発生した強力な引力にさらされ、サハラが目くらましに利用した最後尾の車両が引きちぎられた。

在周围的三个方向形成了三个门。撒赫菈用来遮蔽视线的最后一节车厢也被这不同方向上产生的强大的吸引力扯断了。

#　多重に発動された教典魔導でバラバラにされた車両のが、コンテナの積まれた集積所に飛び散る。サハラでは防ぐ手段がない威力だ。対処を間違えれば五体が引きちぎれていた攻撃に冷や汗を隠せない。

因为多重发动的教典魔导而分裂开的车厢残骸，四散在这片用于堆放货物的地方。这是撒赫菈无法直接应对的攻击。若是刚刚处理失当，四散在这片地方的大概就是自己了。面对这样的进攻，撒赫菈不禁冷汗直冒。

#「処刑人は、世界に必要だ……世界を、守ってきた……我々を残すための犠牲ならば許される。貴様らを討滅し、『』を殺し……ミシェルも、殺す……そうすれば、そうさえ、すれば……処刑人は……処刑人の、私は……私、が……」

「处刑人对这个世界必不可少……处刑人守护着世界……为了让我等留存允许些许牺牲。将你们消灭，把『阳炎的后继』杀死……米歇尔也，杀掉……如此这般，仅有这样，才能……让处刑人……处刑人的我……我，才……」

#　物陰に隠れて『』の様子を窺っていると、手のひらに教典を埋め込んだ背後の腕がく。

藏在阴影里看向『教官』，那埋藏着教典的触手正在她的身后来回扭动。

#　サハラは異形の腕の付け根にある背中の瘤の正体を悟る。

撒赫菈反应过来『教官』的背后，那些异形的触手所连接着的那个肉球是什么。

#　おそらく、脳が収納されている。人間の脳を原罪概念で取り込み、人格も意識もなくして腕を動かし魔導を構築する生体的な導力回路として特化させている。持っている武器と教典からして、元は明らかに神官だ。

恐怕，大脑就在那里。原罪概念将人类的大脑吞噬，抹去人格和意识，在其中构筑专门用于控制触手活动的魔导，最终形成活的导力回路。只剩下用于当做武器的教典可以看出，她们曾经都是神官。

#『』は自分の腕で、頰に残った傷跡をでながらとっくに正気が尽きているをサハラに向ける。

『教官』挥动触手，一边抚过脸上的那道伤疤，一边把早已空洞的瞳孔转向了撒赫菈。

#「私が、奴に笑われることはァ！　なくなる!!」

「你们！再也不能嘲笑我了！」

#　サハラは覚悟を決めた。化け物となった『』相手に逃げられる気がしない。サハラだけなら逃げを選んだかもしれないが、なぜか、マヤを置いて逃げようとは思えなかった。

撒赫菈做出了觉悟。现在似乎无法从已经变成怪物的『教官』手中逃脱。若是撒赫菈自己说不定可以逃走，但她不知为何，无法选择抛下摩耶独自逃跑的办法。

#『導力：接続──義腕・内部刻印式魔導陣──発動【スキル：銀の】』

『导力：接续——义手·内部刻印式魔导阵——发动【技能：银之龙手】』

#　右腕となっている導力義肢を戦闘用に換装する。

撒赫菈把自己右手的导力义肢切换成战斗的状态。

#　相手に教典魔導がある以上、距離をとって戦うのは愚の骨頂だ。逆に近づきさえすれば、範囲魔導は使えなくなる。

既然对手会使用教典魔导，在战斗中拉开距离实在是愚蠢透顶。反而是只有近距离战斗，才能阻止对方使用范围性的魔导。

#「マヤ。あっちの貨物列車、見える？　いまの騒動から逃げようとして、発車準備をしてるやつ。あれに乗れば、『遺跡街』の入り口まで行けるわ」

「摩耶。那边的货运列车，看到了吗？那个想要逃离这边的骚动，做好了发车准备的那辆。坐上那班车，就可以直达『遗迹街』的入口了」

#　サハラの腕の中で、マヤが小さな体を震わせる。戦闘の気配に、彼女はえていた。

撒赫菈的怀中，摩耶小小的身体在不住地颤抖。她对战斗的气氛满怀着恐惧。

#　まずいな、と顔をしかめる。

真笨拙啊，她的小脸皱成一团

#　一人で『遺跡街』まで行く貨物列車に逃がそうとしたのだが、マヤが恐怖で固まってしまっている。

摩耶看起来十分想一个人登上那趟前往『遗迹街』的货运列车，但她的身体因为恐惧而动弹不得。

#「昨日のことだけど……私には、あなたの気持ちはわからない。マヤがメノウから離れてまで行動している理由も、さっぱりよ」

「虽然是昨天的事情……但我还是不明白你的想法。还有摩耶甚至要离开梅诺身边的理由，也没有头绪。」

#　どうすればいいのだろうかと考えて、サハラは、なぜか、昨日の話を掘り返していた。

撒赫菈想着怎样才好，但莫名地却又提起了昨天的话题。

#「だって私、帰りたいところがないし、失いたくない人なんてできたこともない。かを心から信頼したことも一度だってないから、裏切られた経験もない」

「所以我啊，既没有想要回去的归宿，也没有什么不想失去的人物。发自内心地信任某个人更是一次都没有，所以也从没有过被背叛的经验」

#　サハラは幼い頃に死別した両親に大した情を抱いていない。かといって、に帰属意識があるわけでもなかった。修道院で暮らしていた時も、競争意識をむき出しにして落とすことばかり考えていた。修道女の一人として東部未開拓領域の戦線にいた時も、誰かを守りたいなんて気持ちはいたことがない。

撒赫菈对早在自己小时候就撒手人寰的双亲没什么感情。但她对第一身份实际上也没什么归属感。在修道院生活的时候，因为强烈的竞争意识，心中只想着怎样淘汰其他人。只身作为修道女在东部未开拓领域的前线战斗时，也从没产生过想要保护哪个人的感情。

#　彼女がれたのは、たった一人。

她所憧憬的，只有一人。

#『』だけだ。

那就是『阳炎』

#　あんな風に超然とした自分になりたかった。けれども『』に選ばれたのはメノウだった。

撒赫菈也想成为那样风格超然的人。然而被『阳炎』选中的人却是梅诺。

#　あの時に選ばれなかった。憧れに届かなかった。劣等感の塊である自分がみじめで仕方なかったから、メノウと戦った。

自己在那时未被选中。憧憬也没能传达。充满自卑感的自己悲惨而束手无策，与梅诺战斗了

#　サハラの人生は妥協とにまみれている。その癖、自分に噓をつけないから、あっという間に堕落する。

撒赫菈的人生中充满妥协和嫉妒。因此，若是不自欺欺人一下，只消转眼之间就会堕落。

#「理解しろとか、察しろとか、そういうのは、無理。私、自分のためにしか生きていけないもの。だから私は私の人生で、あなたを必要とすることは、きっと、ないわ」

「想要理解、努力观察、然而还是没办法。我，就只能为了自己而活。所以我在我的人生中，一定，不会把你当做我重要的人」

#「な、なによ……げぼくの、下僕のサハラの、くせにぃ……」

「什，什么啊……撒赫菈，撒赫菈不过是仆从，而已……」

#　マヤが、なんでそんなひどいことを言うんだと瞳を潤ませる。な涙を前にしても、サハラの心は大して痛まない。面倒だなぁという気持ちのほうがはるかに大きい。

不知为什么，摩耶说出这么过分的话之后眼睛却湿了。看着眼前稚气的眼泪，撒赫菈没觉得很难过。反而是觉得很麻烦。

#「でも、ほら」

「但是，你看」

#　サハラは自分のためにしか行動できないし、ありもしない感情で誰かを慰めることもできない。いまだって、この言葉がマヤのためになるのかどうかの確信はまったくないまま、不器用に笑いかける。

撒赫菈只能为自己而行动，也无法用没感受过的感情做出安慰。就连现在，也不知道自己说的话对摩耶有没有用，只能讪讪地笑着。

#「私じゃ無理だけど、メノウなら、きっとマヤを必要としてくれるわ」

「虽然我做不到，但如果是梅诺的话，一定会把摩耶当做重要的人的」

#「は？」

「什么？」

#　自分じゃわからないし無理だけど、メノウならなんとかしてくれる。

自己又不明白也做不到，却说梅诺肯定可以。

#　誰かを慰める言葉にメノウが出てくるサハラの台詞を聞いて、マヤの口がぽかんと開く。

听到撒赫菈为了安慰自己，脱口而出就是梅诺。摩耶张了张嘴。

#「……なにそれ」

「……这什么啊」

#　思わずあきれて、次いで、くつくつと体を震わせる。戦闘が間近に迫っているのに、場違いなおかしさに細くて白い肩が震える。

摩耶一下子愣住了，然后，笑得抖了起来。明明战斗近在眼前，她纤细白皙的肩膀却因为这种不合时宜的怪话不住颤抖。

#「あはっ、あはは！　メ、メノウならなんとかって……どんだけ、サハラって、どんだけ……あははははは！」

「啊哈，啊哈哈！到，到底说了多少次……梅诺的话一定会，多少次啊，撒赫菈……啊哈哈哈哈！」

#　どこまでも他力本願のサハラに、マヤはやかに笑った。

摩耶轻快地笑起了不管什么时候都依靠他人的力量的撒赫菈。

#　おかしくて、おかしくて、千年前ですら、こんなに笑った覚えがないほどおかしかった。新しい記憶をおに抱えて、マヤは笑いすぎて出た涙をく。

太好笑了，太好笑了，就算是千年之前，摩耶都不记得自己曾经笑成这样。带着这份新的记忆，摩耶抹了抹眼角被笑出来的眼泪。

#　真面目に説得したつもりのサハラは、不服そうに口を尖らせた。

本打算认真地说服摩耶的撒赫菈，不服气地撅起了嘴。

#「……私、そんなにおかしなこと言った？」

「……我，说了这么好笑的话嘛？」

#「言ったわ」

「说了哟」

#　マヤは小悪魔的な魅力に満ちた笑みで即答する。

摩耶露出一个充满了小恶魔一样的魅力的笑容，如此回答。

#「でも、そうね。いまのサハラの言葉は本当かどうか確かめなきゃいけないわ。だからあたしのために、もうひと頑張りしましょう？　それができたら、ご褒美をあげるわ」

「不过，也是呢。不确认一下刚刚撒赫菈说的话是不是真的可不行啊。所以为了我，再努力一下吧？要是能做到的话，我会好好奖励你的。」

#「えぇー……それとこれとは話が別というか、責任の所在は私にはないというか……。どうにか、私がなにもしなくていい方向にならない？」

「诶——……该说这个和那个是两码事，还是说这根本不是我的职责所在……。总之，就没有让我什么都不做就行的办法吗？」

#「ならないから、つべこべ言わないの！」

「就是因为没有，所以别说这些有的没的了！」

#　叱咤しながら、マヤがこっそりサハラにはめているヤモリの指輪に触れる。真っ黒なヤモリがするりと動き、マヤの影に戻っていく。

虽然发出了斥责，但摩耶却悄悄地碰了碰撒赫菈戴着的壁虎戒指。纯黑色的壁虎灵活地动了起来，回到了摩耶的影子里。

#　呪いなどなくとも大丈夫だと思えたマヤからの、先払いのご褒美だ。

摩耶觉得即使没有诅咒也没关系，提前做出的奖励。

#　指輪が消えたことには気が付かず、サハラは生身の左手でマヤの頭を撫でる。

但撒赫菈完全没注意到戒指消失了，用她肉身的左手摸着摩耶的头。

#「じゃ、行ってくる。帰ったら、ちゃんと養う準備をしててほしい」

「那，我上了。等我凯旋，希望你好好做好照顾我的准备」

#「……大丈夫？」

「……行吗？」

#「ん、大丈夫。私は、負けない」

「嗯，没问题。我，不会输的」

#　意外なことに、思ってもいないセリフがさらりと出た。その言葉にマヤが顔を引き締めて前を向いたのを見て、なんとなく、いまの自分はメノウみたいにうまくできたんじゃないかな、と思えた。

意外地说出了不经思考的台词。摩耶听到这句话，紧张地盯着前方。摩耶不由地开始想起来，现在的自己能够做得像梅诺那么好吗？

#「だから、あなたも頑張って」

「所以，你也要加油啊」

#　送り出した言葉と同時に、マヤは目的地に向かって走り出した。その背中を見送ったサハラが物陰から出て『』と向き合うと、なぜか彼女は立ち尽くしていた。

说出这句话的同时，摩耶也开始走向远处的列车。目送摩耶的背影之后，撒赫菈也从离开阴影，直面『教官』。不知道为什么『教官』一直站在原地。

#　そういえばマヤとの会話中に攻撃の手が止まっていたなと、今さら思い返す。

这么说起来，撒赫菈才注意到，刚刚自己和摩耶对话的时候，『教官』竟停止了攻击。

#「なぜだ……」

「为什么……」

#「聞いてたの？　照れるわ」

「你都听到了？有点害羞呢」

#「あれが原罪概念を使えば、記憶を失ってになればどうなるか、わかっているはずだ」

「要是那个人使用原罪概念，失去记忆变成人灾的话，会发生什么，你应该是知道的吧」

#　純粋概念【魔】。数ある禁忌の中でも恐ろしい魔導系統だ。どれだけの人間が魂を売って悪魔となったのか、どれだけの市民が世界をする魔物の犠牲になったのか。

纯粹概念【魔】。即使在数不尽的禁忌中，也是恐怖的魔导系统。有多少人出卖灵魂成为了恶魔，在这个世界上徘徊的魔物又伤害了多少无辜的人民。

#「あれは、殺してこそ正しいはずの存在だ……なぜ、助ける……なぜ、かばうっ」

「那东西，本是除之而后快的存在……为什么，要帮她……为什么，要包庇她」

#　サハラは目を瞬いた。まるでいま初めてそのことを考えたというような反応だ。

撒赫菈眨了眨眼。她的反应就像是事到如今才第一次想起来这么回事一样。

#「え？　さあ？　なんとかなるんじゃない？」

「诶？所以？船到桥头自然直咯？」

#「なに……？　できるのか、お前に。もしもの責任が負えるというのか!?」

「什么……？区区是你，做得到吗？你担得起这种责任吗！？」

#「なんで私がするのよ」

「为什么是我啊」

#　責任を問われたサハラは、ありえないほどの軽さで肩をすくめる。

被问及责任的撒赫菈，少见的轻巧地耸了耸肩。

#「メノウが全部、なんとかしてくれるに決まってるじゃない」

「梅诺会帮我们解决全部这些问题的」

#　いつだって、自分に責任などないのだ。そのくらいのメンタリティでいたほうが、楽に生きられることを、サハラは経験で悟っていた。

从头到尾，就不要想着去承担什么责任。只有保持这样没有压力的心理状态，才能轻松地活着。这是撒赫菈的人生领悟。

#「それに、これ」

「再说了，看看这个」

#　サハラは、ヤモリの指輪がはまっているはずの義手を前に突き出して、いかに自分が悪くないかを告げる。

撒赫菈伸出自以为还戴着壁虎戒指的义手，用以佐证自己有多厌恶与她同行。

#「この指輪の呪いで、あの子に脅されているの。つまりマヤの行いで世界がどんなに危なくなっても、脅迫されていた私に罪はないってこと」

「我被那孩子用这个戒指上的诅咒威胁了。也就是说不管摩耶怎样危害到这个世界，被胁迫的我都是无辜的」

#「……なにも、ないが？」

「……什么都，没有啊？」

#「え？」

「诶？」

#　ぱちぱちと目を瞬いたサハラは、自分の小指を見る。直前でマヤが呪いを解いていたため、そこにはなにもない。

撒赫菈啪塔啪塔地眨眨眼，看向自己的小指。因为之前摩耶解除了诅咒，现在的小指上什么都没有。

#「……本当ね。不思議なこともあるものだわ」

「……还真是呢。真是不可思议。」

#「ふざけてるのか貴様ァ！　貴様のっ、貴様のようななどよりぃ……！　私たちのほうが、正しいはずだ！」

「你开什么玩笑！比起，比起你们这些东西……！我们这边的才是正道！」

#『』が絶叫して怒りをはじけさせる。肉体のみならず精神を浸食されて我を失っている『』に、サハラは柄でもなく同情心が湧いた。

『教官』怒吼着发泄愤怒。看到不止是肉体，就连精神也被侵蚀，失去自我的『教官』，一反常态地涌起了一阵同情心。

#　彼女はを裏切らなかった。処刑人であった時も命令通りに禁忌を狩り、使命を遵守した。彼女の人生は、処刑人としてなに一つ間違ってなどいない。

她没有背叛第一身份。身为处刑人的时候也遵从命令狩猎禁忌，履行使命。她的人生就是一个标准的处刑人的人生。

#　サハラには、不思議と『』の気持ちがわかった。

但撒赫菈，不可思议得能够理解『教官』的这份感情。

#　間違ったことなどないのに、知らぬ間に道を踏み外している。

明明什么差错都没有，但自己却在不知不觉中走上了岔路。

#　かつて、メノウと戦った時のサハラのように。

就像和梅诺战斗的那个时候的自己一样。

#　けれども、自分と似ていながらも明確に異なる部分もある。

但是，除了和自己相像的部分，也有明显不同的地方。

#「取り戻せるはずだ……さえ、『』さえ、殺せば！　すべてを！」

「该能夺回……如果把你，把『阳炎的后继』，都杀了！全部就！」

#　『』が自ら処刑人候補である修道女の教育に当たるようになったのは、幼い頃のメノウが引き取られてからだ。『』以後と以前では、明確に処刑人のあり方は異なる。

在导师『阳炎』选中梅诺之后，『阳炎』也着手于亲自教育成为处刑人候补的修女们。在『阳炎』之后，处刑人的存在方式与过去发生了明显的变化。

#「の……私たち処刑人の誇りがァ！　この手に！　そうして、認めさせてやるぅ！　この、世界に!!」

「第一身份的……我们以处刑人的荣耀！在这世界上！用这双手！然后，好好确认吧！」

#『』は前世代の処刑人である。

『教官』是前代的处刑人。

#　だから、処刑人の誇りなんて言葉が出てくる。

所以，会说出处刑人的荣耀这种话。

#『』の薫陶を直接受けたメノウはもとより、サハラですら、人殺しに誇りがあるなど信じたことなど一度としてないというのに。

不用说直接受到『阳炎』熏陶的梅诺，就连撒赫菈，也一次都没有相信过这种可以把杀人当成荣耀的事情。

#「『』。あなたじゃ、メノウに絶対勝てないものがあるわ。あいつには、『』も認める才能があったもの」

「『教官』。你的话，绝对不可能赢过梅诺的。她拥有的才能可是连导师『阳炎』都会认可」

#「なんだ……それは、なんだ……！」

「什么啊……这是，为什么……！」

#『』の目は血走っている。もはや数える気にならないほど増えた瞳のどれにも、正気は見当たらない。

『教官』眼中浮现出血色。多得让人数不胜数的每一个瞳孔中，也都无法找到丝毫理智。

#　自分がどうしてこんなざまになったのか、どうすれば現状から抜け出せるのか、とっくに手遅れになっていながらも救いを渇望している。

变成这个样子该怎么办，怎样才能拜托这样的现状，即使为时已晚，也渴望着得到救赎。

#　憐れだ。

可怜。

#　誰かを殺すことで取り戻せるものなど、なに一つない。時代から置いてけぼりにされた彼女に、サハラは澄ました表情で自分の頰を指さして、一言。

没有什么东西能通过杀人的办法失而复得。撒赫菈看着被时代抛弃的『教官』，撒赫菈若无其事地指了指自己的脸，只说了一个字。

#「顔」

「脸」

#　相手の顔から表情が抜け落ちた。

『教官』脸上的表情消失了。

#「あいつ、顔だけは生まれながらの天才だもの。ずるい」

「因为梅诺啊，把自己的天分都拿去长那张脸了。真狡猾」

#　軽い調子で言い切ったサハラに、『』はっになるどころか怒りで青ざめていた。ひたりと自分の頰の傷に手を当てる。血の気が引いて紫色になった唇が動く。

听着撒赫菈轻巧的话，『教官』不止眼中泛红，脸色更是变得铁青。她用手摸着自己脸上的伤疤。因为血气涌动而变得发紫的嘴唇翕动。

#「──死ね」

「——死吧」

#　すべての感情が過ぎ去った後に残ったものは、殺意だった。

全部的感情出现又消散，最后只留下杀意。

#　手に持った四つの教典に、導力が流される。展開されつつある魔導構成は、サハラを封じ込めて殺せる擬似教会を構築する魔導だ。

导力在手持的四本教典中流动。『教官』所发动的，是一个构筑出拟似教会把撒赫菈关在其中杀死的魔导。

#　相手は、修道女で終わった自分などよりよほど格上の神官で、しかも原罪概念の力を得て格段に強化されている。サハラにとって絶望的なほどの脅威を前にして、彼女は笑う。

对手只不过是一介修女，而自己是强得多的神官。而且自己得到了原罪概念的力量，实力更上一层楼。但撒赫菈在这足以令她绝望的威胁面前，笑了出来。

#　サハラはメノウのことが嫌いだ。あんなに綺麗なメノウのことを嫌いになるしかない、みじめな思考回路をしている自分がもっと嫌いだ。

撒赫菈讨厌梅诺。不止讨厌那样光彩夺人的梅诺，更是讨厌总想着坏事情的自己。

#　けれども不思議なことに、いまなら、メノウのことが嫌いな自分を許せる気がした。

但有点不可思议的是，现在的话，似乎能稍微原谅一点讨厌着梅诺的自己了。

#「でも、やっぱり……柄じゃないわね」

「但是，果然……还是比不上呢」

#　マヤのために戦いに残ったサハラは、ちょっと後悔しながらも『』との戦闘に没頭した。

为了摩耶而留在此处战斗的撒赫菈，带着些许后悔，投入了和『教官』的激战中。

#

#　大剣が振るわれる。

大剑挽出一个刀花。

#　大の男の身の丈に迫るほど長く、切っ先が丸みを帯びた優美な剣だ。一般人ならば両手で持ちあげることも難しい質量の大剣を、導力強化の燐光をまとうミシェルは片手で振り回す。

长度接近成年男性身高的这把优美的大剑，在米歇尔的手中划动出一个圆形。对一般人来说用双手都难以举起的大剑，全身缠绕着导力强化的磷光的米歇尔仅用单手就能够挥舞起来。

#　無造作に見えて、力ずくで振るっているわけではない。上段を振り切る前に、手首の力だけで切り返して軌跡が横薙ぎに変化する。明らかな術理でもって、風を切って相手の命に迫る。

米歇尔的剑术大巧若拙。梅诺闪过劈向头部的一击，但米歇尔旋即用腕力扭转大剑的轨迹，横扫向梅诺。她的攻击循着剑理，以劈风之势迫近梅诺的性命。

#「よく避ける」

「躲得好」

#　吐き出された声は誉め言葉ではなく、わしいという感情が乗っている。導力強化によるものか、接近戦の間合いで『』はミシェルの動きについてきていた。

米歇尔说出的话不是称赞，而是充满了牢骚。大概是导力强化的缘故，『阳炎的后继』在近身战斗中已经可以慢慢跟上米歇尔的动作了。

#　優勢なのは明らかにミシェルだ。これ以上、時間をかける意味もなければ接近戦で仕留めることにこだわりもない。マヤに渡した教典の代わりが間に合っていないため、左手は手ぶらだが問題はない。ミシェルは大剣の紋章に導力を通す。

既然优势在自己，那就没必要继续多花时间，也不必拘泥于打近战。由于没来得及取回之前用于转移摩耶的教典，本该拿着教典的左手空空如也，但问题不大。米歇尔让导力在大剑的纹章中流动。

#『導力：接続──断罪剣・紋章──発動【水流】』

『导力：接续——断罪剑·纹章——发动【水流】』

#　大剣に刻まれた紋章に従い、怒濤の勢いで水流が発生する。

带着怒涛之势的水流，从铭刻于大剑上的纹章奔涌而出。

#　鉄砲水かと錯覚しそうな放水だ。『』は、とっさに飛び上がることで直撃を避けた。

这股水流给人仿佛铁炮开炮一般的错觉。『阳炎的后继』为了躲避这道攻击，迅速地向上跳起。

#　狙い通りである。空中ならばかわせまいと、【圧縮】の魔導で高圧水流を放とうとした時だ。

但这正中米歇尔下怀。人在半空中无从闪躲，米歇尔借机使用【压缩】的魔导放出高压水流。

#　大地を揺るがす爆発音が、遠目に見える停車場から響いた。

这一招随之产生的爆炸声甚至震动了地面，就连远处的车站都能听得到声音。

#「なに……？」

「什么……？」

#　予想外の出来事に剣を振り抜き損ねた。『』が無事着地して距離をとる。

『阳炎的后继』挥剑抵挡住了意料之外的攻击，安然落地并与米歇尔拉开了距离。

#　ミシェルは貨物列車の停車場に視線だけを向ける。あそこはマヤが移動していた列車があるはずの場所だ。処刑人たちを誘導するにあたって、『』の居場所はスパイをやらせていたフーズヤードに流させていたが、マヤの情報は誰にも渡していない。

米歇尔把视线转向货运列车的车站。那里应该是摩耶乘坐的火车的所在地。为了引诱处刑人们，米歇尔让芙兹雅德假扮间谍，告诉了处刑人们梅诺的所在地。但关于摩耶的消息可是和谁都没说。

#　だというのに、戦闘が始まっているのが遠目でもわかった。

然而，即使从距离车站有着相当一段距离的此处看过去，也能知道那边爆发了战斗。

#　誰が、と思考を回す。ここに来るまでで騎士たちは『』たちに機能不全にされ、処刑人たちも先ほど壊滅した。マヤを追う人員はいないはずだと考えたところで、先ほど『』を追っていた人員に『』の姿がなかったことを思い出す。

「是谁？」的念头在脑海中回旋。『阳炎的后继』之前已经让追到这里的骑士们失去战斗能力，而处刑人们又在刚刚被全部打倒。米歇尔心想着应该没有再多的人能去追击摩耶，但突然想起刚刚追击梅诺的处刑人中似乎没有『教官』的踪影。

#「あの無能、まさか、マヤ様のほうに……ッ！」

「那个废物，难道，去了摩耶大人那边……！」

#　あちらの戦闘は予定外だった。ここまで来て、『』ごときにマヤを傷つけさせるわけにもいかない。ミシェルは心底から、マヤとハクアの和解を望んでいるのだ。

那边发生的战斗在米歇尔的计划之外。米歇尔做出种种计划，绝不是想像『教官』那样伤害摩耶。她打心底期盼着摩耶和白亚两人能够和解。

#　だが目の前の人物が、駆けつけることができない障害となって立ちふさがる。

然而自己眼前却有一个让自己抽不开身去帮摩耶的绊脚石。

#「よそ見？」

「在看哪？」

#『』が振るった刃が、ミシェルのを切り裂く。

『阳炎的后继』挥动的刀尖，划过米歇尔的侧腹。

#　だが血肉が飛び散ることはなかった。傷口から湧き出るのは、きらめく導力だ。この世界にミシェルの存在を固定しようと循環をする【力】が瞬く間にミシェルの肉体を修復する。

但血肉四散飞溅画面并没有出现。闪闪发光的导力从伤口涌出。在这个世界中循环，同时也维持着米歇尔的存在的【力】在转瞬之间就修复了米歇尔的伤口。

#「そっちが待ち伏せしていたわりには、ずいぶんと気がそぞろね。なにを焦ってるの？」

「明明在这里埋伏了这么久，现在却突然心不在焉起来。你在担心什么？」

#「ちっ……！」

「啧……！」

#　挑発的な台詞に、ミシェルは片目をたわめる。

听到挑衅的台词，米歇尔挠了挠眼睛。

#　自分が策を練って『』を討とうしていたというのに、自分が予定外の襲撃にっている。逆転した心理状態に、たしさが募る。

一方面很想继续落实计划击败『阳炎的后继』，但又因为意料之外的袭击而急躁。两人之间的心理状态发生了微妙的转换，米歇尔的焦虑正在逐渐增加。

#「……そちらこそ、いいのか？　仲間が襲われているぞ」

「……你才是吧？真的没问题？同伴正在被袭击喔」

#「心配してくれるの？　その優しさで、最初から関わらないでくれたらよかったのに」

「你这是担心吗？你真这么好心，那一开始别管我们的事不就好」

#「黙れ。そもそも貴様にマヤ様と一緒にいる権利があるのか？　元処刑人、『』」

「闭嘴。你不会真以为有和摩耶大人同行的权力吧？前处刑人，『阳炎的后继』」

#　動揺を誘うために鋭く問いかける。

为了让对手动摇而发出的尖锐提问。

#「マヤ様は、異世界人だ」

「摩耶大人，是异世界人」

#　オオシマ・マヤ。

大志万·摩耶

#　もともと『』だったという経歴に目を取られがちだが、彼女は『迷い人』だ。自分の意図と関係なく、召喚され、利用され、になった無辜の日本人である。

本来看到她身为『万魔殿』的时候的所作所为，就能知道她是『迷途之人』了。与自己的意志无关，却被召唤、被利用，最后变成人灾的无辜的日本人。

#「お前がいままで殺してきた人間と、本質的にはなにも変わらない。それでも救うのか？　いままで死体を積み上げてきた加害者のお前に、異世界人が救われたいと思うか？」

「她和你过去到现在杀死的那些人们，本质上没什么区别。即使如此你也要救她？你这种以异世界人的尸体相伴的加害者，还想要拯救异世界人？」

#　罪を問うて、メノウの傲慢さを突き付ける。

米歇尔的问罪，直直戳穿了梅诺的傲慢。

#「それに比べて、ハクア様は千年前より異世界人を救う活動を続けられていた」

「与你相比，白亚大人在千年前就开始坚持进行着拯救异世界人的行动」

#「なにを言ってるの？　をつくったのが、ハクアよ。異世界人を禁忌にしたあいつが救っていたなんて、よくまあ言えたものね」

「你在说什么？创立第一身份的，就是白亚哟。把异世界人列为禁忌说成是救了他们，真亏你说得出口」

#「はっ」

「哈！」

#　ミシェルは笑い飛ばす。

米歇尔忍不住笑了。

#「なんのために、『星骸』をハクア様たちが造ったと思っている。だからこそ、お前たちも『星骸』を求めているのだろう」

「你想过白亚大人她们为什么制造了『星骸』吗？你们也正是因为这个原因才会『星骸』为目标展开行动吧」

#「戦略級破壊兵器でしょう。北大陸をくり抜いた跡地を見れば、威力も察しが付くわ」

「战略级的武器对吧。只要看看将北大陆拔地而起剩下的遗迹，就能感受到它的威力了」

#「なに？　いや……もしや、貴様ら」

「什么？不是……难道说，你们」

#『』の答えに、ミシェルが不審げな顔になる。

米歇尔听到『阳炎的后继』的回答，露出疑惑的表情。

#「『星骸』を、本当にただの破壊兵器だと思っているのか？」

「真的就只觉得『星骸』是威力强大的武器而已？」

#　意味深な言葉に『』の動きが一瞬止まる。相手の話を聞くために、戦闘とは無関係に身を乗り出す態勢になってしまった。

米歇尔话里的深意让『阳炎的后继』的动作停了下来。摆出一副暂停战斗的样子，希望米歇尔把话讲清楚。

#「図星か。まさか『星骸』を額面通り破壊兵器程度に思っているとはな。いや、考えてみれば、『盟主』もマヤ様も本来の建造目的は知らんか……。しかし北大陸をくり抜いた、という結果だけにとらわれ過ぎだ」

「我说中了？没想到你们真的只把『星骸』如外表一样当做战略武器了。不过，仔细想想，『盟主』和摩耶大人确实也不知道建造『星骸』本来是为了什么……。不过，仅仅知道掀起了北大陆这种结果也太过无知了」

#　会話の途中とはいえ、ミシェルはその隙を見逃すほど甘くはなかった。

即使在对话之中，米歇尔也抓住了转瞬即逝的机会。

#　話を止めないまま踏み込んだミシェルの一閃はとっさの動きで回避されたが、大剣の柄についた飾りが、こつんと、と『』の顔面に当たる。

米歇尔在说话间，突然开始了进攻。『阳炎的后继』用利落的动作躲开了米歇尔，但挂在大剑手柄上的装饰紧随其后完成了攻击，狠狠地击中了『阳炎的后继』的正脸。

#　攻撃といえないような接触。事実、『』は攻撃と認識できなかったから避けなかったのだろう。

这样的接触甚至不能称为攻击。事实上，『阳炎的后继』面对这个动作，甚至来不及反应，自然更是无法躲避。

#　この首切り剣に、どんな紋章が刻まれているのかを忘れて。

不要忘了切中头部的这把剑上刻着什么纹章。

#『導力：接続──断罪剣・紋章──発動【圧縮】』

『导力：接续——断罪剑·纹章——发动【压缩】』

#　紋章魔導の発動により、接触点へと【力】が収束する。液体を刃と変えるほどの圧力に、べぎりと異音を立てて『』の顔面がひしゃげて潰れた。

纹章魔导自发动开始，就将【力量】向接触点压缩。在这种能将液体变成刀刃一样的压力下，伴随着些许声响，『阳炎的后继』的头部被彻底击溃。

#「ハクア様の敵というには、下らん奴だった──なに？」

「区区尔等，也自称与白亚大人为敌——什么？」

#　勝利の台詞を途中で飲み込む。

胜利的台词只说出了一半。

#　血が、飛び散らない。顔を失った体の全身に亀裂が広がる。これは人間ではない。人間に擬態した魔導兵特有の、換装現象だ。きらめく残骸が青い導力光とともに消失する。

没有四溅的鲜血。失去头部之后，身体上开始龟裂。这不是人类。这是拟态成人类的魔导兵特有的替换现象。闪着光的残骸随着青色的导力光一同消失不见。

#「い、い、こ、と、きーちゃった！　あっは！　あたしのこと、メノウちゃんだと思った？」

「我，来，啦！啊哈！你刚刚一直都以为我是梅诺对吧？」

#　声が響いた。

嗓音响起。

#　この世界に顕現させている体を砕かれ、膨大な質量を持つ本体から換装して復活した彼女は、もとの擬態を取り戻していた。白い肌も、儚い栗毛もない。そこにいたのは薄紫色のくせ毛を腰元まで伸ばしたグラマラスな褐色美人だ。

这个世界中的身体被粉碎后，从拥有巨大的质量的本体中换上新的身体，再次复活的她，恢复了之前的拟态。没有雪白的肤色，也没有好看的栗色头发。而是褐色皮肤，以及长及腰部的淡紫色卷发的丰满的另一个人。

#「残念っ、おねーさんでしたぁ！」

「可惜，这里一直都是姐姐——我哦！」

#　メノウに擬態してミシェルを釣り出したアビィが、会心の笑みで種を明かす。

假扮成梅诺的样子，成功钓出米歇尔的雅比，带着心满意足的笑容，说出了这样的事实。

#　ミシェルは幽霊でも見るかのような視線で、正体を現したアビィに視線を注ぐ。

米歇尔用仿佛看着幽灵一样的视线，看着表明正身的米歇尔。

#「あれあれー、どうしたのかなぁ？　おねーさんのナイスバディに見とれてるぅ？」

「哎呀哎呀——，你在发呆吗？被姐——姐我的好身材迷住了？」

#「……いつからだ」

「……是什么时候？」

#「んー？　きこーえないよー？　年上の質問は聞き取りづらいんだぁー」

「嗯——？你说什么——？年纪大的人说话听不清楚呐——」

#「いつから、お前が『』と入れ替わった!?」

「我在问你是什么时候换掉了『阳炎的后继』！？」

#　わざとらしく耳に手を当てて聞き返したアビィに、ミシェルは怒号をたたきつける。

米歇尔对着特意用手捂住耳朵反问回来的雅比大吼。

#　平静を失っている態度を見て、にんまりとご機嫌に笑う。

看着米歇尔愤怒的样子，雅比开心地笑了出来。

#「騎士くんたちの本部をお仕置きした後だよ。ちょっと考えればわかるでしょ」

「当然是在解决了骑士们的本部之后咯。稍微想想就明白了吧」

#　ぎりり、と歯嚙みをする。

米歇尔的发出咯咯的咬牙切齿的声音。

#　ミシェルは純粋にマヤとハクアの和睦を信じていた。そのためにはメノウが邪魔だと、姿が追えなくなったアビィを一旦捨て置いて、排除にかかっていたのだ。それを逆手に取られた。

米歇尔单纯地相信着摩耶和白亚能够和解。然而梅诺在想要阻止二人见面，因此她把自己追不上的雅比放在一边，打算优先解决梅诺。但现在却完全被对手针对了。

#「ならば……いま、『』は、どこにいる？」

「这样的话……现在，『阳炎的后继』在哪里？」

#「教えてあげよっかぁ？　どうせ、いまからじゃ遅いしね」

「告诉你好吗？反正，你现在都追不上了」

#　アビィが下腹部の歯車に手を当てる。もぞりと這い出したトンボ型の蟲の複眼から、事前にメノウに付けてある蟲の捉えている映像が流れ始めた。

雅比把手贴上下腹部的齿轮印记上。从其中爬出的蜻蜓型魔导兵的复眼上，开始播放之前就开始跟着梅诺的飞虫捕捉到的画面。

#

#『』は自分の部下にサハラを攻撃させた。

『教官』指挥着自己的部下攻击撒赫菈。

#　自分の背中にいる教え子は、いままでにない素直さと優秀さでサハラに攻撃を繰り出すが、導力義肢できながらしのがれた。神官未満の修道女とはいえ単純な攻撃が通じるほど安い敵ではなさそうだ。『』はもう一人の教え子に指示をして、集積所に積まれているコンテナを持ち上げた。

自己背上的学生，以前所未有的顺从和干练发动对撒赫菈的攻击，但全都被撒赫菈的导力义肢抵挡住了。虽说只是未到神官的修女，但撒赫菈看起来并不是个单纯攻击就可以轻易打败的敌人。『教官』指示另一个学生，把仓库里的堆积的货箱举了起来。

#「うっわ」

「唔哇」

#　相手の反応を無視して、コンテナを投てきした。サハラの手前に落ちた巨大な木箱が砕け散り、細かな破片が彼女を傷つける。

随后无视了对手的惊叹，把货箱投向撒赫菈。巨大的木质货箱落到撒赫菈的跟前裂开，四处飞散的细小破片擦伤撒赫菈。

#　一瞬、サハラの動きが止まったタイミングで『』の意思を汲んだ三人目の教え子が狙い澄ました教典魔導を叩き込む。

领悟了『教官』的命令的三个人抓住撒赫菈受伤停止动作的瞬间，开始发动已经瞄准好位置的教典魔导。

#『導力：接続──教典・一章二節──発動【を打ちて、始まりの地を知らしめる】』

『导力：接续——教典·一章二节——发动【打下桩柱使之知晓起始之地】』

#　導力でできた杭が、上から下へと放たれる。地面に穿たれた一撃をかろうじてかわしたサハラが、吹き飛ばされながらも受け身を取る。

导力凝聚成的桩柱从空中落下。撒赫菈与击穿地面的一击擦肩而过，但还是被余波震飞，在空中摆出受身落地。

#『』をまっすぐ見据えたサハラの導力義肢に、導力光が走る。

撒赫菈紧紧盯着『教官』，同时导力义肢中流动着导力光。

#『導力：接続──義腕・内部刻印式魔導陣──発動【スキル：導力砲】』

『导力——接续——义手·内部刻印式魔导阵——发动【技能：导力炮】』

#『導力：接続──教典・二章五節──発動【ああ、敬虔な羊の群れを囲む壁は崩れぬと知れ】』

『导力：接续——教典·二章五节——发动【啊，你们应当知道，包围虔诚羊群的墙壁不会崩塌】』

#『』は自身で防御魔導を発動してサハラの攻撃を弾く。教典魔導の光壁が消えるかどうかのタイミングで、サハラが突っ込んできた。

『教官』发动包围住自己的防御魔导，弹开撒赫菈的攻击。在教典魔导形成的光壁即将完全消失的时刻，撒赫菈开始突进。

#『』は戦いながらサハラの能力を分析する。

『教官』在战斗的同时，也在分析撒赫菈的各种能力。

#　導力義肢は原色概念由来、戦闘用の出力は原罪概念異界から引き出している。まっとうな能力が一つとしてない。幼少期は魔導の覚えが早かったものだが、ずいぶんといびつな成長をしている。

导力义肢源于原色概念，战斗时的力量则是从原罪概念的异界中引出。没有一个正常的能力。虽然在很小的时候就开始了魔导的训练，但却成长成了十分奇怪的样子。

#　数日前までの『』ならば、慎重に対応しながら戦っただろう。牽制を繰り返し、隙をうかがい、能力の底を割り出して適切な対応をしていたはずだ。

要是数日前的自己，或许还需要慎重地对待与撒赫菈的战斗。小心地牵制，观察失误，摸索到撒赫菈的极限后再进行适当的对应。

#　だが、いまの彼女にそんな駆け引きは必要なかった。

但是，现在的自己已经不需要这样绕圈子了。

#　背中から生える腕が、不自然に伸縮する。一撃目。振り下ろされる腕をサハラが回避する。地面が陥没した。導力強化なしでの威力だ。

背后生长出的触手，不自然地收缩了一下。第一击。撒赫菈躲开了挥动的触手地面上出现了一个凹坑。这还是没有导力强化的威力。

#　力だ。力で、押し通せばいい。

这就是力量。这就是所谓一力降十会。

#「本当の化け物になって──ぶッ!?」

「真的变成怪物——唔！？」

#　一本目はかわされ、二本目が防がれ、三本目と見せかけて『』が投てきしたレイピアがサハラを貫いた。

躲开第一根，挡住第二根，然而教官假装成第三根向撒赫菈投来的刺剑贯穿了撒赫菈。

#　サハラが、血を吐いた。命中した刃は、胸を貫いて肺を潰している。致命傷だ。続けて頭をひねりつぶそうと近づいたところで、サハラが顔を上げた。

命中的剑刃贯穿了撒赫菈的胸腔，摧毁了肺部。撒赫菈受到致命伤，吐出血来。就在『教官』准备继续靠近拧下撒赫菈的头的时候，撒赫菈抬起了脸。

#「……ねえ、『』。あなたは、他人から見れば、とてもみっともないけどね」

「……那个啊，『教官』。你在别人看来，很难看啊」

#　明らかな致命傷にもかかわらず、ゼロ距離で義腕に導力を流す。

撒赫菈全然没在意致命伤，在零距离上让导力开始在义手中流动。

#『導力：接続──』

『导力：接续——』

#『』が引くより早く、サハラの導力義肢が魔導を発動させる。

撒赫菈赶在『教官』躲开之前，就发动了义肢中的魔导。

#「私は、あなたのことを笑わない」

「我呢，对你的事情可笑不出来」

#『義腕・内部刻印式魔導陣──』

『义手·内部刻印式魔导阵——』

#「わかるもの。頭がおかしくなるほど、他人を嫉妬する気持ちが」

「我懂的。这种嫉妒别人嫉妒得头脑都开始不对劲的感情」

#『発動【スキル：杭打ち】』

『发动【技能：打桩】』

#　ありったけの導力を込めた一撃が、『』の心臓を吹き飛ばした。

消耗撒赫菈全部导力的一击，让『教官』的心脏部位全部消失了。

#　ゼロ距離でした導力仕掛けのパイルバンカーによって、『』の胸元に風穴が空いて瞳から光が消え失せる。

因为这由导力驱动，紧贴身体发射的贯钉，『教官』的胸前出现了一个空洞，眼中也失去了光芒。

#「あなたの人生を、世界にじゃなくて……『』に認めてほしかったのよね」

「你所希望的，多半不是让这个世界世界……而是让『阳炎』认可你吧」

#　格上の神官を相手に、ぎりぎりの勝負を切り抜けたサハラが膝から崩れ落ちる。嫉妬に支配された『』の気持ちは痛いほどによくわかったが、どうしてだろうか。いまのサハラは、『』にだって他の生き方があったんじゃないかと思わずにはいられなかった。

以更强大的神官为对手，艰难地取得胜利之后，撒赫菈终于支撑不住，倒在了地上。撒赫菈很能明白被嫉妒支配的『教官』的痛苦，但那又怎样呢。现在的撒赫菈忍不住想：对『教官』来说，她的人生只有这样一条路可走了吗？

#「相討ち、ね……」

「两败俱伤，啊……」

#　くと同時に、サハラの肉体が生命反応を停止させる。サハラの死体が塵となって舞い散り、人格を作る精神が導力の経路を通しこの世界にはない空間へと運ばれ、収納していた素材から、自分の体を作る。自分の体の予備に魂が宿って、にゅるんと現世に押し出される。

嗫嚅的同时，撒赫菈的生命活动也停止了。撒赫菈的尸体化为尘埃飘散，塑造人格的精神则通过导力线路去到不存在于这个世界的另一个空间，从那个空间中收纳的素材中，制造出新的身体。灵魂进入预备的身体中，再传送到现世。

#「ま、私は残機があるから死なないけど」

「哎呀，反正我还有备用的身体，死不了啊」

#　新しく生まれたサハラは、ぐっぱと導力義肢を動かす。

新生的撒赫菈咯啦啦地活动了一下导力义肢。

#「はぁ……一回分しかないのよね、残機。補充するまで死ねない」

「哈……只剩一次了呢，残机。只要能补充就不会死」

#　サハラはアビィほど燃費がよくない。どうも原罪概念と原色概念の両方を体の中で両立させている弊害らしく、扱えるスペースが異様に狭いのだ。

撒赫菈不能像雅比那样使用原色概念。似乎是身体中同时存在着原罪概念和原色概念的弊端，撒赫菈能使用的原色空间异常狭窄。

#「さて、マヤを乗せた列車は……もう発車してるわね」

「那么，摩耶坐上的那趟车……已经发车了啊」

#　ここから導力強化をして追いかければ、どうせ騙されているだろうマヤを助けにぎりぎり間に合うだろうか。脳内の地図と自分の能力を照らし合わせていた時だ。

现在开始用导力强化追上去的话，应该将将能在摩耶迟早都会被骗之前追上她的吧。正当撒赫菈参照脑海中的地图，和自己的脚程做着对比的时候。

#「まだ、だ……」

「还，还没……」

#　背後で、声が聞こえた。

听到背后传出些许声音。

#　サハラは目を見張る。ありえない。いくら原罪概念に取り込まれて悪魔と化していようが、核となっている心臓を吹き飛ばされて生きているはずがない。

撒赫菈睁大眼睛。不可能。就算获得了多少原罪概念变成怎样的恶魔，只要是作为核心的心脏被摧毁，都不应该还能活着。

#　だが、『』は生きていた。

然而，『教官』就还活着。

#「それ、なんで……」

「这是，什么啊……」

#　サハラが茫然とした声を漏らす。『』の胸元には向こう側が見えるほどはっきりと風穴を空けたはずだ。

撒赫菈不禁发出茫然的声音。『教官』胸前本该是个被自己击穿，甚至可以看到另一边的空洞。

#　それが、埋まっていた。なくなった心臓の代わりに、彼女は近くにあったものを取り込んで体の一部としつつあった。

但那里现在多了个东西。作为已经消失的心脏的替代，她把附近的某个东西吸收进来当做了身体的一部分使用。

#『』が現れた時に、吹き飛ばしたもの。先頭車両の機関室にあった、列車の動力源。

那是『教官』现身的时候，就摧毁的东西。牵引车头的动力室里面的列车的动力源。

#　導力機関を、心臓代わりに取り込んでいた。

『教官』把那个导力机关，用来替代心脏了。

#　どぅるんッと音を立てて導力機関が駆動する。物質、生物に関わらず浸食して取り込む性質に従って、列車の導力機関を取り込むことで生命を維持して、出力を跳ね上げた。心臓の代わりに同一化した導力機関が『』のシルエットをゆがめる。かろうじて人の形をしていたのが、ついに只の化け物となった。

伴随着咚咚的声音，导力机关开始运作。由于原罪概念无论生物还是物质都能够侵蚀、同化的性质，『教官』通过吞噬列车的导力机关维持生命，力量也得到了增强。但取代心脏与『教官』同化的导力机关，扭曲了『教官』的外形。终究是让『教官』失去了难得维持住的人形，变成了单纯的怪物。

#『導力：接続──教典・二章五節──発動【ああ、敬虔な羊の群れを囲む壁は崩れぬと知れ】』

『导力：接续——教典·二章五节——发动【啊，你们应当知道，包围虔诚羊群的墙壁不会崩塌】』

#『導力：接続──教典・三章一節──発動【襲い来る敵対者は聞いた、鳴り響く鐘の音を】』

『导力：接续——教典·三章一节——发动【尔袭来之敌已倾听，此响彻于耳之钟鸣】』

#『導力：接続──教典・一章二節──発動【杭を打ちて、始まりの地を知らしめる】』

『导力：接续——教典·一章二节——发动【打下桩柱使之知晓起始之地】』

#『導力：接続──教典・八章十二節──発動【正門に跪け。門前は主に続く道である】』

『导力：接续——教典·一章二节——发动【于正门跪拜吧。门前为通往主的道路】』

#　四つの教典魔導が同時発動した。

四个教典魔导同时发动。

#　停車場全体を覆うほどの擬似教会が形成され、内部で音響魔導が鳴り響く。崩壊が起こった。崩れ落ちるに、サハラは抵抗のしようもなく飲み込まれた。

教典魔导形成了一个将车站全部包含在内的拟似教会，教会内部回荡起音响魔导的钟声，把车站夷为废墟。撒赫菈甚至不及抵挡就被落下的瓦砾掩埋。

#

#　火の手が、上がっていた。

火焰熊熊燃烧。

#　擬似教会の一撃により、停車場の列車や積まれていたコンテナ、機材などはすべて原型を失っている。事前に『』が暴れていたためにほとんどの人間は逃げていたが、人命の被害もゼロではない。

拟似教会的一击，把车站中的列车以及堆积着的货箱、货物等等全部摧毁了。不过因为『教官』在这之前的暴行，车站里的人们都已经逃跑，无人被害。

#　荷物の中に可燃性のものでもあったのか、吹き飛ばされた停車場の残骸に火が点いて周囲を燃え上がりつつあった。

应该是货物中有可燃物的原因，它们飞散到车站的残骸中，在周围燃起了大火。

#　炎の温度を感じることもなく、『』は立ち尽くしていた。

『教官』静静地站着，毫不在意周围火焰的温度。

#　勝利した。生き残った。死ねばそこで人の意思は途絶える。ならば自分こそが正義だ。

胜利了。活下来了。如果说死亡就代表着意志的消失。那眼活下来的自己就意味着自己才是正义。

#　力だ。力こそが、あればいい。力さえあれば、相手を圧倒して自分の正しさを示せる。

这就是力量。力量越大，为所欲为。只要有力量，就可以击败对手，彰显自己的正义。

#　だというのに、なぜだろう。

话是这样说，但为什么呢。

#　──くはっ。

——咕哈。

#　笑い声が耳から離れない。自分をあざける声が聞こえ続ける。

那讽刺着自己的笑声一直持续着，不绝于耳。

#　まだ、足りない。なにが足りない。

还有，不足。缺少了什么东西。

#　──貴様はバカか。

——你是笨蛋吗？

#　耳元で聞こえた声に、振り返る。

听到耳边的声音，『教官』猛地转身。

#　炎に、影が揺らめいている。光を遮って発生するシルエットを見て、『』は愕然とする。

有一个人影在火中摇曳。看到那个遮蔽了光线的剪影，『教官』愕然了。

#　そこに、化け物がいた。なんだ、この化け物は。そう声に出そうとして、自分の声帯がなくなっていることに初めて気が付いた。

火焰之中有一个怪物。那个怪物是什么？『教官』正想这样大喊出声的时候，才突然注意到自己喊不出声了。

#　ああ、と腑に落ちた。

啊啊，『教官』感到如坠深渊。

#　影に揺らめく化け物は、自分自身なのだ。

原来那个在火中摇曳的影子，就是自己啊。

#　自分という存在を構成するものが蝕まれている。疑いようもない。自分は原罪概念に蝕まれている。なけなしの理性もまもなく失って、人を襲うしか能がない化け物に成り下がる。

构成自我的存在正在被侵蚀。毫无疑问，自己正在被原罪概念侵蚀。就连最后丁点理智都丧失的话，自己就将变成只知道造成破坏的怪物了。

#　誰が、自分をこんなざまにした。

是谁让自己变成这样的。

#『』に貫かれた頰の傷がうずく。ざらりとした傷跡を撫でる。そうだ。『教官』の処刑人としての誇りが傷つけられたのは、あの時だった。あの時の、あの言葉だった。

被『阳炎』刺穿的脸颊上伤口隐隐作痛。轻轻摸过伤疤。是啊。这个『教官』把它当作处刑人的荣耀的伤痕，是那个时候留下的。还有那个时候的那句话。

#　──この無能が。

——如此无能。

#　ミシェルの声と『』の声が、彼女の記憶の中で重なった。

米歇尔的声音和『阳炎』的声音，在记忆中重合。

#「ッ!!」

「！！」

#　憤怒が、『』の精神を粉々に砕いた。

这股愤怒，粉碎了『教官』的精神。

#『』という処刑人が人格を失う直前に定めた狙いの対象は、『総督』でも『』でもない。

处刑人『教官』在彻底失去人格之前，作为目标的人，既不是『总督』，也不是『阳炎的后继』

#「みぃいいいいいいいいいしぇるぅうううううぅうう」

「米米米米米米米米米米歇尔尔尔尔！！！！！！！！」

#　一匹の化け物が咆哮を上げる。もはや人間の声よりも、導力機関の駆動音に近かった。

一匹怪物发出巨大的咆哮。这声咆哮相比起人类，更像是导力机关的运作时的轰鸣。

#『』の全身に浮かんだ目玉が、一斉にとある一点に向かう。

在『教官』教官皮肤上的所有眼球，一齐看向了同一个方向。

#　ここから少し離れた平原。ミシェルとアビィが戦っている場所へと一気に駆け出す。すでに二本足で走ることすら煩わしい。背中から生える六本の腕を足に、獣のように、しかし獣ではありえない化け物そのものの姿で駆動した。

那边是一个距这里稍有点距离的平原。『教官』开始向着米歇尔和雅比战斗的地方冲去。就连用双脚走路都嫌太慢。她开始用背后长出的六根触手支撑在地上，像野兽那样，只不过驱动的是一具与野兽大相径庭的怪物的身体。

#

#　昇りはじめた朝日の光に押されるように、マヤは走っていた。

摩耶像是被升起的朝阳催促着一样在奔跑。

#　乗り換えた停車場から『遺跡街』の最寄り駅には、三十分ほどで到着した。

只过了三十分钟，就从换乘站到达了这个距离『遗迹街』最近的车站。

#　最初、メノウたちから離れた時とは違う。そそのかされたわけではなく、確固たる目的を持って走る。

现在的她，和刚刚离开梅诺她们的时候不一样了。现在自己并不是被谁欺骗，而是为了明确的目标而奔跑。

#　ここまで、ずっと迷っていた。ミシェルに会って、ハクアの声を聞いてから、ずっとだ。

直到现在，她都处在迷茫中。从见到米歇尔，听到白亚的声音开始到现在，一直都是。

#　誰かに必要とされたい。ハクアの誘いは、マヤの弱い心を見透かした勧誘だった。マノンがいなくなったいま、マヤは誰を裏切ってもよかった。母が死んでしまった世界で、なにを犠牲にしてもよかった。

想成为谁的重要之人。白亚的邀请，是看透了摩耶心理的弱点之后的引诱。玛农死后的现在，摩耶背叛谁都没关系。在这个母亲早已去世的世界，做出什么牺牲都没关系。

#　だって、マヤを必要としてくれる人が、いなくなってしまったのだから。

因为，愿意珍视摩耶的人，全都已经不在了。

#「はぁっ……はっ……！」

「哈……哈……！」

#　たどり着いた場所は、見渡す限り、傾斜を描いて陥没した荒野だった。

自己追寻的这里，一望无际，是一片有着一些坡度而荒芜的大地。

#「……本当に、なんにもなくなっちゃったのね」

「……真的已经，什么都没有了啊」

#　ここには、かつて町があった。世界で一番広く、世界でもっとも発展した巨大都市が。

这里曾经有一个城市。在世界上占地最大，最为先进的巨大的都市。

#　変わり果てた景色に浮かんだ感傷を振り払い、マヤはハクアが待ち合わせに指定していた建物に目を向ける。

把对于时过境迁的这幅风景而浮现出的伤感放在一边，摩耶看向白亚决定要在其中见面的那个建筑物。

#　その教会は、地面にぽっかりと空いた穴の上に存在した。小さな村くらいならば飲み込めそうなほどの直径がある穴の淵からいくつもの橋が伸び、中心に立っている教会を支えている。普通の教会は上に尖塔が伸びるのだが、ここに関しては逆だ。穴の底に向かって教会様式の塔が建てられている。奈落の底まで続くその逆さの尖塔が『遺跡街』へと続く道だ。

那个教会建立在一个足有一个小村庄大小空洞之上，从深渊中延伸出数条桥梁，支撑着洞穴中央的教会。普通的教会的尖塔向着天空，而这座教会的尖塔朝向着深渊。这里建造的教会样式的尖塔直指洞穴下方。这些指向深渊底端的逆转的尖塔，就是通往『遗迹街』的路。

#　人の気配はない。おそらくハクアが人払いをしている。マヤは見張りもいない橋を渡って、中空に建造された教会に入った。

周围空无一人。恐怕是白亚让这里的人们全都离开了。摩耶穿过无人看守的桥，进入了建造在空中的教会。

#　騙されているだろうとサハラは散々言ったが、マヤはハクアが来る可能性だけは決して低くないと見積もっていた。

尽管撒赫菈已经说过多次白亚骗了她，但摩耶还是觉得白亚会如约前来的可能性不低。

#　なぜならば、ハクアがマヤのことを警戒するはずがないからだ。

要说为什么，那就是因为白亚应该不会忌惮自己。

#　騙すにしろなんにしろ、警戒の必要がないほど弱いマヤの前ならば、ハクアが姿を現すことは十分にあり得た。

不管是不是欺骗，只不过是是在弱小得没必要警戒的自己面前现身而已，白亚应该会来见面的。

#「ハクア！　あたしが来たわよ！」

「白亚！我来了！」

#　一声して中に入ると、礼拝堂に一人の少女がいた。

随着呼喊落下，礼拜堂里多了一位少女。

#　長すぎるほどに長い黒髪をした少女だ。服こそ、セーラー服ではない。真っ白な貫頭衣を着用しているが、メノウにそっくりな顔つきからして、シラカミ・ハクアに間違いない。

一位头发长得有点过度的黑发少女。至于衣服，当然不是水手服，而是纯白色的贯头衣。但从她那与梅诺十分相似的外貌来看，来者毫无疑问就是白上·白亚。

#「君なら、来ると信じていたよ。久しぶりだね、マヤ」

「我相信如果是你的话，一定会来的哟。好久不见了，摩耶」

#「ええ。確かに、来たわ。あなたの言う通り、一人で」

「嗯。确实，我来了。按你说的一样，一个人来的」

#「ああ、そうだね。君は変わらない。千年前の、あの時のままだ。変わり果てたボクとは、対照的だ」

「啊啊，真的是啊。你真是没变，还和千年前那个时候一样，。然而我却回不去了」

#「あなたは聖地から出てきたの？」

「你是离开圣地到这里的吗？」

#「……ははっ、まさか」

「……啊哈哈，怎么会」

#　ここに現れたハクアは、あっさりと否定した。

出现在这里的白亚，果断的否定了摩耶的话。

#　ミシェルはハクアがマヤのために聖地を離れたと本気で信じていたが、そんなはずがない。ここにいるハクアは、ハクアでありながらもハクアではない存在だ。

米歇尔相信着白亚会为了摩耶而离开圣地，但事实却不是那样。在这座教堂里的这个人，是一个是白亚但又不是白亚的存在。

#「『』を逃がしてから、聖地で代わりになる肉体をつくっているんだ。あいつがちゃんの時間を停止させたから、逆に時間の猶予ができた。手間にはなるけど、また一から灯里ちゃんと同一になれる素材をつくる時間がね。この肉体は、試作中のものを活用してボクの精神を【】させているんだよ。いわば分体なんだけど──」

「因为放跑了『阳炎的后继』，所以在圣地制造了代替她的身体。她停止了灯里的时间，也算是让我有了时间。虽然很费事，但我还是花时间从头开始做了个能够和灯里同步的素材。为了用一用这具还在试做中的身体，我把自己的精神【凭依】在了上面。也就是所谓分身的东西——」

#　ハクアが手を前に出す。指先が、真っ白になっていた。白くなった部分に生命の気配は感じられない。

白亚把手向前伸出。指尖的地方变成了纯白色。变成白色的指尖上感受不到任何生命的气息。

#「どうも、馴染まなくてね。【憑依】しているだけで、純粋概念に肉体まで侵される」

「总觉，还没习惯呢。只是【凭依】而已，纯粹概念就会开始侵蚀肉体」

#　それが、タイムリミットの理由らしい。

似乎这就是白亚定下期限的原因。

#　あの白い部分が広がれば、ハクアの精神を宿している分体とやらは生命維持ができなくなるのだろう。

如果白色的部分进一步扩大的话，大概这具寄宿这白亚的精神的分身就不能维持生命了吧。

#「あなたの肉体が本物かどうかなんて、どうでもいいことだわ」

「你的身体到底是不是真的这种事，根本没关系的」

#「そうかい？」

「是吗？」

#「ええ。あたしがここに来たのは、千年前のあの時のことを、あなたの口から聞くためだもの。精神がホンモノなら、それでいいの」

「嗯。我来到这里，是想要听你亲口说出千年前的那个时候发生了什么。只要精神是本人就可以了。」

#「安心しておくれ。それに、間違いはないよ」

「那我就安心了。而且，我就是我哟」

#　ならばいい。マヤは改めてハクアを見る。

这样就好。摩耶再一次看向白亚。

#　千年前の中心街。いまはマヤたちが立っている場所でハクアはの純粋概念を写し、彼女を化させた。それと同時に、『星骸』は真の意味で完成した。

千年前的中心街。就在现在摩耶和白亚所站的地方，白亚把廼乃的纯粹概念覆盖，把她变成了人灾。与此同时，『星骸』也在真正意义上的完成了。

#「答えて、ハクア。廼乃を ──あたしたちを裏切った行為には、なにか訳があったの？」

「告诉我，白亚。为什么把廼乃——为什么背叛了我们，你有什么隐情吗？」

#　渾身の問いを突き付けるマヤに、ハクアはがらんどうな黒瞳を向ける。

对于把自己的满心的疑问突然问向自己的摩耶，白亚对她报以空洞的黑瞳。

#「ここで起こったことを、君は覚えているかな」

「你还记得呢，之前在这里发生的事情」

#「当たり前でしょう！　忘れるわけが、ないじゃない！」

「那当让了！这种事情，怎么会忘记！」

#「そうか」

「这样啊」

#　千年生きた人物は、ぽっかりと虚ろな声を響かせた。

活过千年的任务，吐出了只有空虚的声音。

#「ボクは、もう忘れてしまったよ」

「我啊，早就忘掉了」

#　どれほど印象的な出来事でも、人は時間に勝つことなどできない。いままで、時間に挑む権利を与えられた人間は、この世界でも一人しかいない。

就算是怎样印象深刻的事物，人类终究无法战胜时间。直到现在获得了挑战时间的权力的人，在这个世界上也只有一个。

#　純粋概念【時】を魂に宿した異世界人、トキトウ・アカリだけだ。

那就是灵魂中寄宿着纯粹概念【时】的异世界人，时任·灯里。

#『導力：素材併呑 ──小聖堂・教会建築魔導紋章 ──起動【障壁内陣結界】』

『导力：素材吞并——小圣堂·教会建筑魔导纹章——启动【障壁内阵结界】』

#　教会に常備されている結界魔導が発動した。

白亚发动了每座教堂中都会刻印的结界魔导。

#　外部からの攻撃を遮断する結界は、同時に内部にいる人間を閉じ込める。結界によってマヤの逃げ場はなくなった。

这个结界可以抵御外部的攻击，但同时也能将人关在其中。这个结界让摩耶无处可逃。

#　かりそめの体に【憑依】したハクアが、手を伸ばす。

【凭依】在这个试做品的身体中的白亚，伸出了手。

#　千年前、『星骸』の真下で廼乃にそうしたように、マヤの胸元に手を当てる。彼女のワンピースに空いた真ん中の穴から晒された肌に、真っ白な指先が触れた。

就像千年前在『星骸』的下方，对星崎廼乃做的事情一样，把手岸上了摩耶的胸口。白亚雪白的指尖碰到了摩耶从紧身衣的洞口处露出来的皮肤。

#「覚えているのは、あの時に回収し損ねたことだけだ。君の【魔】だけをね」

「我想起来的事，只有那个时候还有一个东西没有回收。也就是你的【魔】」

#　マヤは、まっすぐにハクアの顔を見る。

摩耶立刻盯着白亚的脸。

#「……あたしたちを、騙していた理由すら、忘れたっていうの？」

「……就连，欺骗我们的原因，都已经忘了吗？」

#「ああ、そうだ。もう、過去はどうでもいいんだ。いまグリザリカを落とすのに、君の純粋概念が有用だっていう理由でしかない」

「啊啊，是啊。既然是已经过去的事，都无所谓了。现在你的纯粹概念有用，也只是因为可以用来进攻葛里萨利嘉而已。」

#　ハクアは罪悪感も見せることなく首肯する。彼女の視線は、どこか遠くに向けられている。ただの情報となってしまった記憶を掘り出し、どうにかして感情を付随させようとして、それでも動かない心に落胆する。

白亚不带任何罪恶感地肯定了摩耶的想法。她的视线仿佛在盯着无穷远的别处。从记忆中回想起的只有不附带任何感情的单纯的情报消息，即使如此毫不动摇的心中也出现了些许悲伤。

#「……そう、なんだよ。最初から最後まで、君たちを騙していたということだけしか、覚ええていない。なんでも、どうしても、どうでもよくなった」

「……是啊，什么啊。我只记得我从头到尾都骗了你们。算了，无所谓了」

#　まったくの無感動で言い切って、純粋概念を発動させる。

说完不带任何感情的话，白亚发动了纯粹概念。

#「それがボクの罪で、罰だ」

「这就是我的罪与罚」

#『導力：接続 ──完全定着・純粋概念【白】──発動【漂白】』

『导力：接续——完全固定·纯粹概念【白】——发动【漂白】』

#　ハクアが操る純粋概念【白】は、精神に干渉して人格を抹消する魔導【漂白】を発動できる。記憶を消費することでと化す異世界人に対しては、あまりに強力だ。

白亚所操作的纯粹概念【白】能够发动干涉人的精神，抹消人的人格的魔导【漂白】。这个魔导对于消耗了记忆之后便会变成人灾的异世界人来说非常危险。

#　だが、その魔導にさらされながらも、マヤは微塵も焦りを見せない。

然而，摩耶直面这个魔导，也没有表现出一点慌张。

#　自分の魔導の効きの悪さに、ハクアは怪訝な顔をする。精神を宿しているとはいえ不完全な分体で純粋概念を発動させたからか、あるいはマヤの肉体の純粋概念【魔】という特殊性ゆえか、本来ならば瞬く間に記憶を削る魔導は、徐々にしか効力を表していない。

自己的魔导并没如想象一般发挥效果，白亚露出惊讶的表情。是因为纯粹概念是由只有精神转移的不完全的分身发动的？还是说摩耶的身体因为纯粹概念【魔】而产生了一些特殊性？原本只要一瞬间就可以抹去他人记忆的魔导，只在慢慢地产生些许效果。

#「肉体はともかく、精神はあなたって言ったわよね」

「身体就不管了，你说过精神是你自己呢」

#「それが、どうしたんだい？」

「那又怎么样？」

#　千年前の真実を知っても、マヤの心にさほどの落胆はない。十中八九、ハクアは自分を騙してここにおびき寄せたのだろうということは、マヤだってわかっていたのだ。

就算知道了千年前的真相，摩耶也不会觉得非常失落。因为摩耶知道，白亚约自己在这里，十有八九只是为了把自己骗过来而已。

#【漂白】に蝕まれながら、マヤはがしり、と自分の胸に触れるハクアの手を摑む。

胸前还在被【漂白】侵蚀着，但摩耶却突然紧紧抓住白亚正按在自己胸口上的手。

#　彼女は、待っていたのだ。

这个瞬间，摩耶已经等待了许久。

#　ハクアが純粋概念【魔】に干渉するため、無防備に自分に触れる、その瞬間を。

白亚为了干涉自己的纯粹概念【魔】而毫无防备地靠近自己的这个瞬间。

#「人の精神に干渉する魔導は、あなたの専売特許じゃないってこと」

「干涉别人精神的魔导，可不是只有你会用」

#　至近距離でハクアと顔を突き合わせたマヤが、不敵に笑う。

摩耶盯着白亚近在咫尺的脸，反而爽快地笑了起来。

#　ハクアがマヤの純粋概念を利用しようとしていることくらい、すぐに気が付いた。

如果只是说白亚盯上了自己的纯粹概念，那摩耶早就注意到了。

#　千年前のマヤの弱さを知っているのだから、本人が現れてマヤを取り込もうとするだろうと予想は付いていた。

既然白亚知道千年前摩耶的弱小，那就很容易想到她可能会亲自前来把自己抓走。

#　マヤは、ハクアが二人きりで自分に会いに来ると言った時に、思い付いたのだ。

摩耶早在白亚说这次见面仅限于自己和她两个人的时候，就想到了。

#「あたしの純粋概念【魔】は──精神も、浸食するわよ」

「我的纯粹概念【魔】，也可以侵蚀精神」

#　自分の純粋概念ならば、ハクアを倒すことができるのかもしれない、と。

摩耶想着，自己的纯粹概念，说不定也可以击败白亚。

#『導力：接続──』

『导力：接续——』

#『混沌癒着・純粋概念【魔】──』

『混沌粘连·纯粹概念【魔】——』

#「ま──」

「等——」

#「待たない」

「就是现在」

#　マヤは引こうしたハクアの手に指を絡めて、がっしりと摑む。

摩耶把自己的手与白亚十指相扣，紧紧抓住。

#　メノウではなく、『星骸』の力に頼るまでもなく、自分がここで全力を尽くせば、ハクアを倒せる。自分を裏切り続けたこの世界を自分が救ってやることで、ざまぁみろと言ってやれる。

不依靠梅诺，也不依靠『星骸』的力量，只要自己在这里用出全力，就能击败白亚。摩耶要对这个总在背叛自己的世界赐下救赎，对这个世界发出「走着瞧」的呼喊。

#　誰もが思い付かなかった自分の可能性に賭けて、世界を出し抜くためにマヤは一人でここまで来たのだ。

赌上无人发现的自己的可能性，摩耶为了让世界重新认识自己，而只身来到了这里。

#『浸食【原罪概念：魔】』

『侵蚀【原罪概念：魔】』

#　ずぶり、とマヤの手がハクアの肉体にもぐりこむ。痛みはない。あるのは全身が総毛立つ異物感と不快感だけだ。それに耐えながら、逃げようとした精神を見つけて、摑み上げる。

摩耶的手噗嗤一下刺进白亚的身体中。并不疼痛，只感觉到全身都是汗毛直立的异物感和不快感。一边忍耐着这种感觉，一边找到了白亚想着逃脱的精神，缠上了她。

#「う、ぐぅ……！」

「唔，咕……！」

#　ハクアの精神が身をよじって抵抗した。【漂白】の魔導は、原罪概念の浸食を相殺していく。そう、相殺だ。多くの魔導現象を一方的に浸食した【漂白】ですら、原罪概念の浸食と食い合っている。

白亚的精神扭动着进行抵抗。【漂白】的魔导和原罪概念的侵蚀相互倾轧。是的，倾轧。就连能够单方面侵蚀许多魔导现象的【漂白】，也会被原罪概念侵蚀。

#　マヤが勝てる確信などない。【漂白】は異世界人にとって最悪の魔導だ。ハクアがマヤの純粋概念を取りこんでおしまいになる可能性のほうがずっと大きい。

摩耶并不自信自己能取得胜利。对异世界人来说，【漂白】是极为恐怖的魔导。白亚顺利将摩耶的纯粹概念取走的可能性并不低。

#　それでも。

即使如此。

#　自分が世界を変えるために、マヤは全力を注ぐ。

摩耶为了改变这个世界，倾尽自己的全力。

#「や、ぁ、あああああああああ！」

「呀啊————！」

#　ハクアと接続した経路に、自分の魂に癒着した導く力に乗せて、マノンから受け取ってサハラたちと育んだ、ありったけの記憶を注ぐ。

用自己灵魂中蕴含的导力，把从经由玛农得到的，以及与撒赫菈一行共处的记忆，全部注入到与白亚连接的地方。

#　純粋概念【魔】の根本。原罪概念とはなにか、という問いにマヤは答えることができない。

纯粹概念【魔】的本质。所谓原罪概念，到底是什么？其实这个问题，摩耶也回答不了。

#　もとから存在して、この世界と断絶していた異界が、マヤという異世界人が召喚された時に彼女を魔導素材として経路がつながった。

这是在过去就早已存在，但与这个世界没有任何关系的异界。只有被像摩耶这样的异世界人召唤的时候，才会以她为魔道素材，与这个世界连上通路。

#　原罪概念は、マヤが生んだわけではない。この世界で人類が発祥するより早く存在した異界だ。本来的に、原罪概念は【力】が満ちた世界であり、物質が存在しない。導力そのものが、意思のない導力生命体に近いのだ。

原罪概念也并非源自摩耶。它早在这个世界的人类发祥之前，就已经存在了。原罪概念本来是一种【力量】遍及世界，没有实体的一种存在。而这个世界中的导力，也更加近似于没有意志的导力生命体。

#　この世界の人間が導力を与えることで、そこに意思が宿る。この世界の摂理を正常な自分の世界のものにしようとするのが、原罪魔導の浸食作用である。

这个世界的人们也是因为有导力的运转，而产生意识。把这个世界的运行的规律化为己用，这就是原罪魔导的侵蚀作用。

#　マヤの肉体を入り口にして、その作用がハクアを食らいつくそうとする。

此时，这种作用正在以摩耶的身体作为入口，作用在白亚的身体上，侵蚀着她。

#「なぜ、ここまで、する……！　に戻るのが、こわく、ないのか……！」

「为什么，要做到这一步……！你，不怕变回人灾吗……！」

#「恐いわ。でも、決めたの。あたしたちを裏切ったあなたを、マノンを殺したあなたを、絶対に、許さない。思い知らせてやるって」

「害怕。但是，你知道吗！你背叛了我们，还杀了玛农。我早就下定决心，绝对不会放过你」

#　過去の自分に揺らがずに、確固たる感情を込めてにらみつける。

摩耶不再因过去而动摇，用眼神表达了自己坚定的感情。

#「あたしの力は、ただ弱いだけじゃなかった」

「我的力量，不只有弱小而已」

#　純粋概念【魔】は最弱なだけではなかった。四大と、のちの世にささやかれる災厄となった。

纯粹概念【魔】不再是最弱的那个。而是已经成为了在后世中流传的四大人灾之一的灾难。

#「なにかを与えることだって、できた」

「对你造成一些伤害，还是做得到的」

#　精神だけになったサハラに肉体を与えることができたように、擬似的な人の命を与える魔導にもなった。見るもおぞましい力でも、使い方次第では有益になったはずだ。

就像之前能够给予了只剩下精神的撒赫菈肉体一样，魔导的效果可以给予他人拟似的生命。虽然是看似很恐怖的力量，但根据使用方法，也能变得对人有益。

#　もしもマヤがもっと昔に自分の純粋概念に向き合っていれば、違った未来があったのかもしれない。異界から生命を召喚し、召喚した生命でこの世界を浸食し、なにもかもを変質させるというおぞましいだけに見えた自分の力だって、役に立てることができたのかもしないのだ。

摩耶如果能更早一点直面自己的纯粹概念，说不定就能促成不同的未来。从异界召唤生命，利用召唤的生物侵蚀这个世界。自己这份可以让让一切物体变质的恐怖力量，说不定也能发挥某些作用。

#　千年前は役に立てようとも思わなかった。有無を言わせず純粋概念の検体として捕らえられた過去がトラウマだった。になった後の自分の能力のおぞましさが恐ろしかった。記憶を削る純粋概念なんて試したくもなかったし、向き合いたくもなかった。

摩耶在千年前从没想过自己能做什么。曾经莫名就被抓走，作为纯粹概念的样本遭受实验的噩梦一般的过去。变成人灾之后更是对自己的这份力量感到恐惧。她既不想使用会消耗记忆的纯粹概念，也不想面对这份力量。

#「あたしは、自分を変えることができる」

「我也是会改变的」

#　自分は前の自分ではない。捕らえられた憐れなでもない。すべての経験を経て、マヤは決めたのだ。

自己已经不是以前的自己了。不是那个被抓起来的可怜的大志万摩耶。摩耶结合自己的全部经历，做出决定。

#　自分のすべてと引き換えに、四大にも勝る傷を星につけようとしているシラカミ・ハクアを止めてやる、と。

白亚想做的事情会对世界造成不逊于四大人灾的伤害。自己就算付出一切，也要阻止她。

#「そうか……」

「是吗……」

#　浸食していく原罪概念が、漂白現象を上回りかけた、その刹那。

随着原罪概念的侵蚀现象慢慢压倒漂白现象的那个瞬间。

#　不意に、ハクアが優しく微笑んだ。

白亚突然露出温柔的微笑。

#「あんなに弱かった君が、そんな風に変われる出会いが、あったんだね」

「以前那么弱小的你，也会变成这样呢」

#　ぎくり、とマヤが身をすくめた。

听到这话，摩耶的身体有点颤抖。

#　マヤは、半ば自分を捨てる覚悟できた。に戻ってもいいと、どうせ、こんな世界に未練はないと。自分を必要としてくれる人なんていないと。自分たちを裏切り、マノンを殺したハクアを倒せるのならと、決意を固めた。

摩耶基本已经做好了牺牲自己的准备。即使再次变为人灾也在所不惜。即使自己对这个世界没有留恋，即使这个世界没有珍惜自己的人。但只要一想到被白亚背叛的朋友们和被她杀害的玛农，摩耶就坚定了自己要打倒白亚的决心。

#　だから、想像もしていなかった。

所以摩耶也从来没有想象过。

#　──メノウなら、きっと、マヤを必要としてくれるわ。

——要是梅诺的话，一定，会珍视摩耶的。

#　サハラが、あんなことを言うなんて。

撒赫菈说了这样的话。

#　おかしくて、バカみたいで、だから信じてもいいかもしれないと思えた言葉だった。もしかしたら、求めていたものが手に入れられるかもしれない。マヤがマヤとして生きていても、必要としてくれる人が、現れるのかもしれない。

这句话听起来有些奇怪，又有些蠢，但正因如此，却让人觉得相信一下也没有问题。说不定在无意之中，自己正追寻的事物其实早在自己手中。即使摩耶还是摩耶，但珍视自己的人，说不定已经出现了。

#　サハラとの数日間が、マヤに、そう思わせた。

与撒赫菈在一起度过的那几天，让摩耶有了这样的想法。

#「そうだよ、マヤ。君は幼くて、可能性にあふれていて──」

「是这样哦，摩耶。你还小，你的未来有着无数的可能——」

#　優しげなハクアの声がマヤに未練を思い出させる。

白亚温柔的声音牵动了摩耶的回忆。

#　ハクアを道連れにしてやろうという決心が、もろくも崩れ去る。記憶を消費する喪失感に耐えかねて、みるみるうちに【漂白】が優位になる。ここに来るまでに見つけた、自分との縁を自覚させることで、になる恐怖が蘇る。

与白亚同归于尽的决心倏然消失。记忆不断消失的空虚感也难以忍耐，【漂白】一下子又取得了上风。摩耶前往这里之前看到的，那些与自己相关的事情，重新唤起了摩耶对人灾的恐惧

#「──だから、君は弱いんだよ」

「——所以说，你真的很弱啊」

#　いくら強く覚悟を決めたつもりでも、純粋概念と向き合っていても、マヤは小さな子供でしかなかった。

无论定下了怎样的决心，但当她直面纯粹概念的时候，摩耶都还只是个小孩子。

#　もしもマヤが、この世界に未練を残していなかったら、マヤはハクアに勝ったかもしれなかった。マヤの純粋概念は、分体とはいえハクアの精神を捕らえていたのだ。

如果摩耶对这个世界没有半点留恋，说不定真的可以胜过白亚。摩耶的纯粹概念，虽然只是分身，但能够抓住白亚的精神。

#　だが、マヤはどうしようもなく、弱かった。

但是，摩耶却什么都不想做，弱小。

#　自分を必要としてくれるかもしれない人がいると、それだけで生きたいと思ってしまうほどに。

一想到说不定有人珍视自己，摩耶就无法再想和白亚同归于尽了。

#　記憶を十分に残した状態で、マヤは浸食を止めてしまった。

剩余的记忆还非常充足，但摩耶却停下了侵蚀。

#「あ……」

「啊……」

#　一気に、漂白現象がマヤの肉体に広がる。純粋概念【魔】を己のものとするべく、ハクアが再び腕を伸ばす。

漂白现象一下子就在摩耶的身上扩散开来。为了夺取纯粹概念【魔】，白亚再一次伸手。

#「惜しかったね、マヤ。君は──」

「真可惜啊，摩耶。你——」

#　最後まで言い切る前に、教会が揺れた。

白亚话还没说完，教会就摇晃了起来。

#　外からの攻撃だ。ハクアの手が止まる。

是外部的攻击。白亚停下了侵蚀。

#「──なに？」

「——什么？」

#　ハクアが発動させたのは、教会を守護する結界だ。建築様式をそのまま魔導陣にした守りはたやすく打ち破れるものではない。

白亚发动的是保护教会的结界。这种按照建筑样式展开的魔导阵，不是轻易就能击破的东西。

#　だが外からの攻撃は一度では済まなかった。二度、三度と教会の結界を揺さぶる音が鳴る。五度目で、とうとう耐え切れず、教会を覆っていた導力光が砕け散った。

但是外面的攻击并没因为一次失败而停止。结界外响起再一次、第三次因攻击而发出的响声。随着第五次攻击，结界终于抵抗不住，覆盖于教会上的导力光碎裂四散。

#　壁が吹き飛んで、外の光が差し込んだ。

墙壁也随之破裂，外侧的光线从坡口中流泻进来。

#　逆光を背負って現れたのは、ハクアと同じ顔をした人物だ。彼女は粉塵を吸い込まないように黄色のケープを口元に寄せながら礼拝堂に踏み入り、風のような動きでマヤを抱えてハクアから引き離す。

逆着光线出现的人，长相与白亚相同。她把黄色的披肩遮住口鼻阻挡灰尘，而后走进礼拜堂。迅速地抱起摩耶，与 白亚拉开距离。

#「こそこそとたくらみをするのが好きなわりに、相変わらず、詰めが甘いわね。あなたをもとに私が生まれたなんて、そのお粗末な頭の出来に接していると信じたくもなくなるわ」

「你还是和以前一样，又天真得不行，又喜欢进行一些偷偷摸摸的企图。一想到你这愚钝的样子，我就不想相信我居然是因你而生」

#　迷い、傷つき、自分と向きあって挑戦し、そして敗北しようとした少女を救うために現れた人物を見て、ハクアの顔がゆがむ。

迷茫，受伤，向自己发起挑战，在少女即将失败的时候却有一人赶来把她救走。看到来者，白亚的表情有点扭曲。

#　一人でハクアと戦って終わるつもりだったマヤは、驚きに目を丸くして彼女の名前を呼んだ。

一心想和独自与白亚战斗到最后的摩耶，惊讶地睁大眼睛，叫出了来者的名字。

#「メノウ……!?」

「梅诺……！？」

#「ええ」

「是啊」

#　さっそうと現れたメノウは、マヤを安心させるために笑いかける。

飒爽地现身于此的梅诺，脸上挂起的笑容让摩耶的心安定了下来。

#「迎えに来たわよ、マヤ」

「我来接你了哟，摩耶」

#

#　ミシェルは顔色を失くしていた。

米歇尔脸上失去了血色。

#　アビィと戦うことすら忘れて、投影される映像に食い入るように意識を向けている。飛ばした蟲の偵察映像を中継しているのだが、意外なほどの効果に、当のアビィが面食らってしまった。

她连与雅比的战斗都停下了，全神贯注地紧紧盯着投影出来的画面。只不过是播放出来飞虫侦查的画面而已，但这意外的效果让雅比有点始料未及。

#「バカな……」

「原来是笨蛋吗……」

#　彼女はハクアとマヤの和睦を望んでいた。ハクアを信じていたミシェルにとって、彼女がマヤに危害を加えていた光景は言葉にならないほどショッキングなものだった。

米歇尔一直期盼着白亚与摩耶和好。正因为深信着白亚，她现在才会对白亚使徒加害于摩耶的画面震惊得哑口无言。

#　さらに、信じられないことがある。ミシェルは愕然とした口調で呟く。

甚至还有更加让她无法相信的事情发生了。米歇尔有点结巴着开口。

#「ハクア様が、マヤ様に……それに【憑依】だと──」

「白亚大人，对摩耶大人……那个是【凭依】——」

#　映像が投影されたのはそこまでだった。

画面在此中止。

#「あ」

「啊」

#　アビィが小さな声を上げる。ミシェルとアビィの間に轟音とともに化け物が割り込んできた。そいつが映像を投影していた蟲を踏みつぶしたのだ。

雅比发出了一点声音。一个怪物随着一声巨响插进了米歇尔与雅比之间。正是它踩碎了投影画面的飞虫。

#「みしぇええええええるぅうううううううううううううううううう！」

「米歇——尔——！」

#　けたたましい鳴き声を上げたのは、異常に長い六本足を生やした異形の生物だ。全身には数えきれないほどの耳目が不規則に並んでおり、いびつに膨らんだ胴体には列車の導力機関を取り込んで心臓の機能を果たしていた。

身上生长着六根长得异常的腿的异形，发出震耳欲聋的叫声。全身不规则地遍布着数不清的耳目，膨胀扭曲的身体中包裹着正在发挥着心脏的作用的列车的导力机关。

#　もとは人間だという面影をほとんどなくした姿に、ミシェルは苛立たしげに片目をたわめる。

看到她已经完全失去了人类的外形，米歇尔焦躁地眯起一只眼睛。

#「くっ……なぜこいつが、魔物に!?　まさか、マヤ様にやられたのか……？」

「啊……你怎么会变成魔物？难道，袭击摩耶大人的就是……？」

#　イレギュラーな事態に悪態をつく。

米歇尔对眼前发生的诡异事情口出恶言。

#　低音の吠え声が響いた。心臓となった導力機関の導力光を口から吐き出し、『』が疾走する。正気を失っていながらも、狙いは完全にミシェルだ。

低沉的声音开始轰鸣。『教官』因为快速的移动，成为心脏的导力机关的导力光正从『教官』的口中冒出。即使失去了意识，她依然锁定着米歇尔。

#　必然的に、アビィが自由になる。『』の動きに合わせて、彼女の上に乗る。触れた場所は、心臓となっている導力機関だ。

与此同时，雅比获得了自由。她配合着『教官』的动作，站了上去。并且摸上变成心脏的导力机关。

#「あはっ。魂まで原罪概念に浸食されてるから、もうどうなってもいいよね、これ」

「啊哈。既然就连灵魂都已经被原罪概念侵蚀了，那对这家伙做什么都行吧」

#「待て──ちぃ!!」

「等——啧！！」

#『導力：素材併呑──アビリティ・コントロール──起動【スキル付与：バーサーカー】』

『导力：素材吞并——雅比莉蒂·康卓尔——启动【技能赋予：狂—战—士—】』

#　アビィのお腹に描かれた歯車が、かちりと音を立てて回る。導力機関に惜しみなく素材を注がれ、列車を駆動させるレベルから街区を賄える導力炉へと進化を果たす。人の絶叫とも、導力機関の駆動音とも区別がつかない大音声が鳴り響き、導力炉がまき散らす熱気が周辺の雪を融解せて水蒸気を発生させる。

画在雅比小腹上的齿轮图案，发出了咔啦啦的转动声音。雅比毫不吝惜地对导力机关注入素材，把这个导力机关从只能驱动列车的级别升级成了能够对街区供应导力的导力炉。导力机关的轰鸣声已经大到无法与人的怒号区分，导力炉散发的热量更是把周围的积雪融化、蒸发消失。

#「やっぱ妹ちゃんみたいに導力循環はしないかぁ……。ま、足止めには十分かな」

「果然不能像妹妹酱那样建立道理循环啊……。算了，缠住米歇尔应该够用了」

#　あまりの高出力に排熱が追いつかず、肉体がドロドロに溶け始めている。意識が消失して情念の塊となっている『』が教典魔導の狙いをつける。これを無視するわけにはいかないと、ミシェルは『』に向き直った。

身体配合不上这过高功率的发热，开始溶解，变得粘粘的。意识消失变成只剩下依靠本能驱使的『教官』成为了教典魔导的目标。米歇尔当然不能无视这种事，她盯着『教官』。

#　予定外の事態に振り回されているミシェルの様子を、安全圏まで離脱したアビィは愉快げに笑い飛ばす。

看着被预料之外的事情缠住的米歇尔的样子，顺利脱离危险范围的雅比绽放出愉快的笑容。

#「自業自得？　策士、策に溺れる？　嵌めようとした相手に嵌められて足止めされて、どんな気分？」

「自作自受？聪明反被聪明误？被想要陷害的对手找上麻烦，是什么感觉？」

#　彼女はべぇっと舌を出して一言。

米歇尔吐吐舌头。

#「ざまぁーみろ」

「走着瞧」

#　人に絡む魔導兵は、意地悪く、自分より年上のミシェルをあざ笑った。

对人胡搅蛮缠的魔导兵，带着恶意，嘲笑比自己年长的米歇尔。

#

#『導力：接続 ──不正共有・純粋概念【時】──発動【回帰】』

『导力：接续——不正共有·纯粹概念【时】——发动【回归】』

#　マヤの胸元が漂白現象に襲われているのを見て、メノウは躊躇なく、導力銃を介することなく【回帰】を発動させた。ごっそりと精神を消耗した感覚があったが、無視して純粋概念【時】の制御に集中する。【漂白】の威力を考えると効かない可能性もあったのだが、幸いなことに、マヤの肉体が原罪概念を宿している影響もあってか、それともハクアが分体を介していたからか、【回帰】が漂白を打ち消してマヤを肌色に戻していく。

看到摩耶胸口还在被漂白现象侵蚀，梅诺毫不犹豫，没有通过导力枪就发动了【回归】。梅诺立刻感觉到有大量精神在被消耗，但她忽略掉这种感觉，专心地控制着纯粹概念【时】。想到【漂白】的威力，或许【回归】也有可能没有作用。但不知是因为摩耶的身体中有着原罪概念的影响，还是因为那只是白亚通过分身发动的【漂白】，【回归】幸运地顺利阻止了漂白，摩耶的胸口也渐渐恢复了血色。

#　ハクアに心情を悟られないために余裕の面持ちを保ちながらも、メノウは内心で胸を撫で下ろす。マヤは無事だ。それもメノウが予想もしていなかった勇姿を見せていた。

为了不让白亚察觉，梅诺保持着轻松的神情，但她在心里已经长长地缓了口气。摩耶平安无事。而且自己还意外地见识到了的摩耶的英姿。

#　彼女は、ハクアと戦って、追い詰めていた。

她与白亚战斗，把白亚逼上了绝路。

#　ただ騙されて独断行動をとったとばかり思っていたマヤは、メノウの予想を飛び越え、自分の因縁と向き合って、魂に癒着した純粋概念にも恐れず戦って、ハクアを追い詰めた。

本以为只是被白亚欺骗，做出独断的行为的摩耶，超越了梅诺的想象。直面过去的友人，也克服了灵魂中附着的纯粹概念的恐惧，就这样战斗着，一度取得了上风。

#　戦えない、弱い子だとばかり思っていた。騙されているから助けてあげないと、と無自覚な上から目線で駆けつけた。

自己只觉得她不能战斗，还很弱小。心中只想着必须要帮助被骗的摩耶，这样不自觉地用大人的视线看轻了她。

#「ほんと、私は見る目がないわ」

「我真是看走眼了啊」

#　メノウは自分の目が曇っていたことを自覚する。

梅诺终于意识到自己的眼前蒙着一片阴翳。（梅诺发觉到自己擅自地没想过要认识真正的摩耶。）

#「マヤ」

「摩耶」

#　彼女が求めているのは、きっと、者からの言葉ではない。

她所追求的，一定，不是从大人的角度说出的话。

#「あとは、任せて」

「之后就交给我吧」

#　戦いを引き継ぐための力強い言葉に、マヤの目が潤んでからこくりと頷いた。

听到这句继续战斗的有力话语，摩耶湿润着眼睛点了点头。

#　うらぶれた教会で、聖地崩壊以来、メノウは因縁の相手と相対する。

在这个被击破的教会中，自圣地崩坏以来，梅诺再一次与命运的对手相向而立。

#　マヤに向けていた笑顔とは打って変わった冷徹な表情で、迷いなく導力銃を向ける。

面对摩耶的温柔笑容迅速变成了冷酷的表情，毫不犹豫地对白亚举起手中的导力枪。

#「よくも私の仲間をたぶらかしてくれたわね。覚悟はできているんでしょうね」

「你竟然欺骗了我的好友。想必是做好觉悟了吧」

#「ボクの仲間だよ、マヤは」

「摩耶可是我的好友哟」

#「騙そうとしたくせに？　それで、反撃を食らって負けそうになっていた分際で？」

「即使骗了她也还是？还有，马上要被我的反击打败的现在也是？」

#　小気味よく笑ってやると、ハクアの顔が嫌そうにゆがむ。マヤを騙して誘い出したつもりのハクアが手痛い反撃を受けていたのは、痛快だった。

看到梅诺愉快地笑起来，白亚的表情有些厌烦地动了动。本想着骗摩耶出来，却遭到了惨痛的反击，让梅诺十分开心。

#「ミシェルは、どうしたのさ。君ごときに、彼女を突破できる力があるはずがないんだけどね」

「米歇尔在做什么？像你这种水平，应该是没办法打败她的」

#「なんであんたなんかに教えてやらなきゃいけないのよ。その顔を見るだけでも気分が悪いのに。もう、ここで消えなさい。その体……どうせ、本体じゃないんでしょうけど」

「为什么搞得好像什么都得跟你说一遍啊。明明只要见到那张脸心情就开始变差了。请你差不多了就从这里消失。那个身体……反正也不是本体对吧」

#「そうだね。分体だよ。本体にいる時と比べれば、純粋概念の威力も落ちてしまっている」

「是啊。是分身哟。相比起本体，纯粹概念的威力也有些降低」

#　ハクアが冷ややかに笑う。

白亚冷冷地笑着。

#「この肉体は、君と同じようなものさ」

「这具身体，和你是一样的东西呢」

#　明らかな皮肉だが、メノウは動じない。

明晃晃的讽刺，但梅诺不为所动。

#「あんたと会話をする気はないわ。私がいま話さなきゃいけないのは、マヤだから……ああ、でも、言っておくことがあるわね。ありがとう」

「没什么心思和你继续说话。我现在不得不说这些东西也是因为摩耶……啊啊，但是，要提前说一声的事也是有的。谢谢你」

#　にっこりと満面の笑みで礼を言う。

梅诺突然露出满脸的笑容，对白亚道谢。

#「あなたがミシェルを、ここの入り口に立たせなかったおかげで、思ってた百倍楽に『遺跡街』に入れそうだわ」

「多亏你没有让米歇尔守在这里，让我进入『遗迹街』的难度比想象中要轻松了不止百倍」

#「能天気なものだね。【星読み】に会うため『遺跡街』に入るなら、そこからが本番だ」

「这个无关紧要。要是你们进入『遗迹街』是为了见【观星】的话，到那个时候才是真正的开始」

#「そう？　あんたは、ここで退場だけどね。本番で仲間外れなんて、かわいそうなことね」

「是吗？但你现在就要退场了呢。正片开始了却被排挤在外，真可怜啊」

#「……確かに、この肉体は、もう限界だ」

「……确实，这具身体也到达极限了」

#　原罪概念の浸食と自分の魔導の反動で、ハクアの分体の肉体は崩れはじめている。

被原罪概念侵蚀，还有自己的魔导的反噬，白亚的这具分身的身体已经开始逐渐损坏了。

#　純粋概念に耐えうる素体というのは、それほどに生み出すのが難しい。

制造能够承受纯粹概念的身体，就是这么困难。

#　だがあと一撃、ハクアにも純粋概念の魔導を放つだけの余裕があった。

但要说只是释放纯粹概念的魔导，白亚还有再进行一次攻击的力量。

#「これをしのげたら、『遺跡街』に行くといい。しのげたら、だけどね」

「要是能在这类战胜我，去『遗迹街』也行。能通过这里的话，呢」

#　不吉にささやいたハクアの分体が、魔導を編む。

白亚的分身说着不祥的话，开始编织起魔导。

#『導力：接続──』

『导力：接续——』

#　見せつけるような、ゆっくりとした魔導行使。ただ莫大な導力を集めて、集めて、押し固めた力でもって、あらゆる心を恐怖へと風靡させる魔導は、塩の大地で戦った時に目にしたものと同一だ。

像是有意展示给梅诺一样，缓慢地发动着魔导。但是有巨大的导力在被某种坚实的力量不断汇聚，汇聚。这种让人心里充满恐惧的魔导，与在盐之大地战斗的时候，梅诺所看到的魔导一样。

#『完全定着・純粋概念【白】──』

『完全定着·纯粹概念【白】——』

#　あの時のメノウは、ハクアが無造作に放つ純粋概念をひたすらに避けるしか手立てがなかった。恐怖に心が震えて、なにもできないと怯えて後退した。

那时的梅诺，完全束手无策，无法躲避白亚毫不造作地释放的纯粹概念。感受着震撼心灵的恐怖，还有束手无策的弱小，无法战斗。

#　だが、あれから半年。

但是，现在已过去半年。

#　メノウは新たな力を得ている。

梅诺获得了新的力量。

#『導力：接続──短剣銃・紋章──発動【迅雷】』

『导力：接续——短剑枪·纹章——发动【迅雷】』

#　メノウは導力銃の照準を合わせると同時に、紋章を発動。導力銃の弾丸を【迅雷】に変化させる。続けてメノウが構える導力銃が変形した。導力の枝でできた銃身が、メノウの左腕と同化するかのように絡みつき、大きく輝く砲口を作り上げる。

梅诺在瞄准导力枪的照门的同时，发动纹章。把导力枪的子弹变成【迅雷】。随后梅诺把端起的导力枪继续变形。导力的枝条制造的枪身，像是要与梅诺的左手融为一体一样缠绕上来，就这样制造了一个发出强烈的亮光的炮口。

#「純粋加速」

「纯粹加速」

#　行使する魔導を意識するために呟き、自分の魂の奥深くに精神を沈める。

为了调动起即将发动的魔导，梅诺低声念出魔导的名字，把精神沉入灵魂的深处。

#『導力：接続──不正共有・純粋概念【時】──』

『导力：接续——不正共有·纯粹概念【时】——』

#　メノウの精神に触れた【時】の純粋概念が、ごっそりと、なにかを奪い取っていく。目には見えないからこそ大切な、メノウを支えるなにかだ。一度失えば、取り戻すことができない、なにかだ。

当梅诺的精神触碰到纯粹概念【时】的时候，仿佛有什么东西一下子被夺走了。那是某些支撑着梅诺的，无法真切地看到的重要之物。一旦失去就无法再次得到的某物。

#　心を蝕まれていく感覚の影響か、なぜかメノウの視界が青く染まっていく。メノウの魂とつながり続けている経路が、奪い取ったメノウの意識の一部をここではないどこかへ連れ去る。

或许被侵蚀心灵的感觉影响到了，梅诺的视野染上了蓝色。被夺走的梅诺的一部分意识，顺着与梅诺灵魂相连的线路，去往了别处的一个地方。

#　そこは、静かな世界だった。

那里是一个静谧的世界。

#　庭園に似た、小さく完成された世界。完璧な平穏を保つ箱庭。戸棚にしまわれた宝石箱のように美しい世界は、一人の少女のために存在した。

一个小巧完整，像一个庭院一样的世界。一个保持着完美的平衡的箱庭世界。这个像橱窗中的珠宝展柜一样美丽的世界，只为了一个少女而存在。

#　黒髪の彼女は膝を抱いており、胸に真っ白な刃が刺さっている。メノウとの旅で付けていたカチューシャはない。代わりに、というわけでもないだろうに青い蝶々が止まっている。その髪飾りのように蝶々だけが、ゆっくりと羽を動かしている。

一头黑发的她环抱着膝盖，一块白色的剑刃刺在她的胸口。与梅诺一同旅行时得到的发圈不见了。取而代之，但也算不上的一只蓝色的蝴蝶停在那里。但那只像发饰一样的蝴蝶，却在缓缓地颤动着翅膀。

#　アカリが、そこにいた。

灯里，就在那里。

#「アカ──」

「灯——」

#　メノウがたった一人の親友の名前を呼んで、手を伸ばそうとした瞬間。

梅诺呼唤出唯一的挚友的名字，就在她即将伸手的瞬间。

#「──リ」

「——里」

#　小さな世界はかき消え、メノウの意識が現実に舞い戻る。

这小小的世界忽而消失，梅诺的意识也回到了现实。

#　アカリが見えた時間は、一瞬未満だった。ハクアとメノウは、互いの魔導を放つ寸前で向き合っている。

见到灯里的时间连一瞬都不到。白亚与梅诺两人还是相向而立，两人的魔导都还需要些许准备。

#　目に映るのは自分の最悪の敵だけだ。メノウは、しっかりと【時】の手綱を握って導力銃に充塡している【迅雷】へと注ぎ、ハクアにはっきり告げる。

眼中倒映着的是梅诺最难以对付的敌人。梅诺小心地掌握着速度，缓缓地向装填在导力枪里的【迅雷】中注入【时】。同时明确地通知白亚。

#「いつか、本体も殺す。だから首を洗って待ってなさい」

「我迟早会把你的本体也杀死，洗干净脖子等着吧」

#「できやしないよ。ボクが君から、ちゃんを取り返すんだ」

「你做不到的。我才是一定会把灯里酱从你手里夺回。」

#　ハクアが純粋概念を放つ準備を終え、メノウは【導枝】でできた輝く銃口を向ける。

白亚结束了释放纯粹概念的准备，梅诺也把【导枝】制成的闪光的枪口指向白亚。

#『発動【混沌】』

『发动【混沌】』

#『発動【加速→迅雷】』

『发动【加速→迅雷】』

#　ハクアの魔導発動と同時に、彼女が前に向けた手のひらから先の三次元すべてが白く染まっていく。世界が上書きされて真白にリセットされる現象が迫るのを見ながら、メノウは引き金をひいた。

白亚在发动魔导的同时掌心朝前，把一切都被染成了纯白。看着将世界尽数涂抹成纯白的现象逼近，梅诺扣动扳机。

#　光の速度に迫る雷が放たれた。

放出了速度接近于光的迅雷。

#　すさまじい反動にメノウの腕が跳ねあがり、【導枝】の銃身が砕ける。何倍かと問うことが無粋なほど純粋に【加速】した【迅雷】が、ハクアの放った魔導を打ち砕く。拮抗など起こらず、相殺などでは止まらずに突き進む魔導の雷は、【混沌】を打ち砕いてハクアの精神が宿っていた肉体を情け容赦なく木っ端微塵に打ち砕き、それでも収まらずに教会の屋根を吹き飛ばす。

巨大的后坐力让梅诺的手高高跳起，裂纹【导枝】构成的枪身上遍布。【迅雷】上附加着让加速倍数失去意义的纯粹【加速】。魔导的雷光带着摧枯拉朽的气势击碎【混沌】，随后继续前进，毫不留情地把这具寄宿着白亚精神的躯壳化作飞灰，继而又掀翻了教会的屋顶。

#　メノウが撃ち放った雷は、屋内を屋外に変え、穴を越えて射線上の地面をり抜け、さらには雷の熱量で一面の雪を消し去っていた。

梅诺发射的【迅雷】，把室内改成了室外，飞跃洞穴，击穿地面，雷电的热量甚至融化了一片积雪。

#　間違いのない勝利だ。広々とした風景にメノウはぐうっと体を伸ばす。銃身となっていた【導枝】を解除し、晴れ晴れと笑う。

毫无疑问的胜利。梅诺在这广阔的风景前伸了个懒腰。然后解除了组成枪身的【导枝】，愉快地笑了。

#「うんっ、すっきりした！　気分がいいわっ」

「嗯，爽！真好啊」

#　メノウには珍しいほど明るい笑みだ。ハクアに対抗できるようになった自分の成長を知り、幻覚かもしれないが、久しぶりに親友の顔を見ることができた。敵を倒して、ここまで気分がよかったのは初めてかもしれない。

梅诺难得地露出了明快的笑容。意识到自己已经成长到可以对抗白亚，尽管可能是幻觉，但自己似乎见到了许久未见的挚友。梅诺大概是第一次在打败敌人后能开心到这种程度。

#　朗らかな笑顔のメノウは、マヤに目線を合わせるために膝をつく。

梅诺带着开朗的笑容，为了与摩耶平视而跪了下来。

#「さ、行きましょ。『遺跡街』はすぐそこよ」

「来，我们走吧。『遗迹街』就在眼前了」

#「お、怒らないの……？」

「梅诺没，没有生气吗……？」

#　珍しく、気まずそうにマヤが聞いてきた。彼女なりに勝算があったのだろうが、独断での行動には変わりない。もしもハクアがマヤの純粋概念【魔】を手に入れた場合、アビィをはじめとする魔導兵が劣勢に陥ることになった。ハクアが憂いなくグリザリカを陥落させる力を得る寸前だったのだ。そうなれば、拠点を失ったメノウはハクアにたどり着く以前に、という数と質が揃った集団に押しつぶされていた。

摩耶少见地，带着尴尬发问。虽说她有一定胜算，但这并不能改变她擅自地行动的事实。万一事态变成白亚顺利得到摩耶的纯粹概念【魔】，以雅比为首的魔导兵们立即就会陷入劣势。白亚距离得到轻易就能够攻陷葛里萨利嘉的力量只有一步之遥。若是那样，失去根据地的梅诺会在找到白亚之前，就被数量和质量双方面都占据优势的第一身份们打败。

#「あのね、マヤ。謝るのは私のほうよ。ごめんなさい」

「听好哦，摩耶。要道歉的是我才对。对不起」

#「え？」

「诶？」

#「私は、あなたのことを弱いって思っていたわ。保護するべき子供だとしか、見ていなかった。うべき異世界人としか見れなかった」

「我只觉得你不够强。只觉得你是需要保护的孩子。只想着你是需要补偿的异世界人」

#　メノウにとって、マヤは頼る相手ではなかった。守るべき子供で、すべき異世界人だ。対等に接するには、あまりにも障害が多かった。マヤは、まさしくメノウの罪悪感の象徴のような子供だったのだ。

梅诺从没把摩耶当做值得依赖的伙伴。只当做是应该保护的孩子，让自己赎罪的异世界人。她为自己能够平等对待摩耶增添了过多障碍。摩耶只不过是象征着自己的罪恶感的孩子。

#　だからいまここで、目を逸らし続けていたマヤと目線を合わせて向き合う。

所以梅诺要在这里，好好地看着总是飘忽着视线的摩耶。

#「でも、あなたは戦った。あなたのおかげで、『遺跡街』への道は開けたわ。だから、ちゃんと聞かせて？」

「但是，你战斗了。多亏了摩耶，通向『遗迹街』的道路才得以敞开。所以，能再和我说说吗？」

#　マヤの視線の高さに合わせたメノウは、マヤのふにふにしたほっぺを、ぎゅうっと押しつぶす。怒らないとは言っていないのだ。形のよい目じりをきゅっと持ち上げて、問いかける。

为了配合摩耶的视线的高度的梅诺，用力揉了揉摩耶软软的脸蛋。梅诺可还没说过自己没有生气。她提起摩耶形状姣好的眼角，问道。

#「なんで、こんな無茶をしたの？」

「为什么要这样乱来？」

#

#　ハクアとまったく同じ顔の少女が、自分を問い詰めてきた。

长着和白亚一样的脸的少女，责问起自己。

#　不意打ちで怒られて、マヤの目じりに、なんでか涙が浮く。きっと、顔を不細工にされたせいだ。胸に詰まる気持ちに言い訳をして、マヤはつっかえつっかえに言葉を吐き出す。

梅诺突然间表达出来的气愤，让摩耶的眼角浮现了些许泪珠。一定是被揉成了花脸的原因。摩耶不断把心里堆积着的感情化作言语，吐露了出来。

#「あたしは……」

「我……」

#　少し前なら、絶対に素直には言えなかった。けれどもメノウは、ヒーローみたいに自分を助けてくれた。それだけなら、どうしてもハクアとメノウの共通点がマヤをわせただろうが、いまはサハラの言葉がマヤの背中を押してくれた。

在之前一些时候，摩耶肯定不能这样率直地说出来。但是如今，梅诺像英雄一样出现，帮助了自己。若只是这样，摩耶或许会因为白亚与梅诺的共同点而踌躇。但摩耶又想起了撒赫菈的话。

#「さみしかった」

「好孤独」

#　おそるおそる、自分のやわらかい本心を、むき出しにする。

摩耶带着些许畏缩，把自己柔软的真心，交予了梅诺。

#「千年前に裏切られて、マノンもいなくなって、お母さんも死んじゃって、もう日本に戻る意味がなくなって……一人ぼっちで、さみしかった……」

「千年前白亚背叛了我们，玛农也不在了，母亲也早就去世。回去日本已经没有意义……现在只剩我自己，好难过」

#　必要とされたかった。母親も妹もいなくなったこんな世界で、必要とされないのなら、消えたってよかった。だからハクアに会って、話して、決着をつけたかった。

想得到珍视。母亲，妹妹都已经不在的这个世界，既然无人珍视自己，就此消失也好。所以才会前来与白亚见面，交谈，想要做出决意。

#「誰かに必要とされたくて……あたしがハクアを倒せたんなら、あたしがになったって、あたしは世界に必要だったんだって、誰もが認めてくれるって、思った……！　一人でも、できることがあるんだって……この世界に、言ってやりたかった！」

「想要得到重视……我以为如果我打倒了白亚，如果我变成了人灾，如果我对世界必不可少，就会有人认可我……！我想让这个世界知道，我就算一个人，也有我一个人能做到的事……！」

#　ぽろぽろと涙をこぼす。をしゃくり上げさせながら、心を明かしたマヤは聞く。

泪水如泉般涌出。摩耶哽咽着说出了自己的心声。

#「それって、悪いこと？」

「这是坏事吗？」

#　サハラが受け取めながらも解決をぶん投げた想いに、メノウは答えを出してくれるだろうか。

这个撒赫菈听了，却不置可否的想法，梅诺又会给出怎样的回答呢？

#「……マヤ」

「……摩耶」

#　期待と不安をない交ぜにして、マヤは自分の名前を呼んだ彼女を見る。じいっと、言葉を探すメノウを見つめる。

摩耶的心中交织着期待与不安，看向说出了自己名字的梅诺。紧紧盯着正在组织语言的梅诺。

#　救いを求めるようにマヤに見つめられたメノウが口を開く。

被摩耶用寻求救赎一样的眼神盯着的梅诺开口了。

#「そのさみしさは、きっと、あなたの一生にあり続けるわ。誰かのやさしさだけを信じて、誰かのやさしさを求めるだけだったら、ずっと、ずぅっと、さみしいままよ」

「这样的孤独，一定会贯穿你的一生。如果只是在意着他人的温柔，只知寻求他人的温柔的话，一定，一定，会像这样孤独下去的」

#　メノウが口にしたのは優しい慰めではなかった。むしろ、に近い。

梅诺说出的话不是温柔的安慰。不如说，更像是斥责。

#「マヤが抱えているさみしさは、きっと私が抱いている罪悪感と同じものよ。解決することなく、人生にまとわりつく。さみしがりのあなたには、つらいのはわかるけどね、大丈夫よ」

「摩耶心中的这份孤独，一定与我心里的罪恶感是相同的东西。没有什么解决方法，会伴随着我们一生。我知道这样的孤独让人十分难过，但没关系的」

#　マヤに語りかけるだけではなく、自分に言い聞かせるような口調だ。

梅诺的语气不像是在对梅诺说，更像是说给自己听。

#　メノウは、とん、とマヤの胸に開いた穴に触れる。

梅诺伸出手点了点摩耶胸口紧身衣的空洞。

#「あなたは強い」

「摩耶很强的」

#　マヤに告げられたのは、甘やかしでも、同情でも、慰めでもない。

摩耶听到的，不是娇惯，不是同情，也不是安慰。

#「誰かの優しさを信じて待つんじゃなくて、必要な人を振り向かせる強さを持っているもの」

「不是等待，期待着谁的温柔，而是要拥有能让重要的人驻足于身边的强大」

#　マヤは彼女の強さで、傍にいてくれる誰かを見つけて、振り向かせることができる。

摩耶用自己的强大，一定能够找到，也能够让人们愿意陪伴自己。

#　無理やりついて来たこの旅程ですら、メノウも、サハラも、アビィも、ミシェルも、ハクアも、小さな彼女に振り回されっぱなしだったのだ。

就像摩耶这段乱来的旅途中，梅诺、撒赫菈、雅比、米歇尔还有白亚，她们都牵挂着年幼的摩耶。

#「だから、マヤ。こんな世界だけど、見捨てないであげて」

「所以说，摩耶。这个世界不怎么样，但也不要轻易放弃哦」

#　口調を緩めたメノウが、マヤの頭を優しく撫でる。

梅诺的语气缓和下来，温柔地摸了摸摩耶的头。

#「あなたは、世界に必要とされているのよ」

「这个世界早就离不开摩耶了哟」

#　ふと、おかしさがこみ上げてきた。いまのメノウの言葉は、きれいに整っている。説得力もある。だけどサハラと同じく、メノウもマヤのよりどころになるとは言わなかった。

突然，有种不同的感觉涌上摩耶心头。刚刚摩耶说出的话，逻辑流畅，具有说服力。但梅诺和撒赫菈一样，没有说自己能够成为摩耶的依靠之类的话。

#　千年前、ハクアは迷わずマヤを救って居場所になってくれた。弱かったマヤがありがたいと感謝する必要さえないほど自然に、どこまでも甘えさせてくれた。

千年前，白亚积极地救下摩耶，还给了她容身之处。尚还弱小的摩耶便顺其自然地，沉溺在了白亚给自己的安稳之中。

#　そうして一人になったマヤは、なんにもできない子供のまま終わった。

然后，孤身一人的摩耶，以一事无成作结（，变成了人灾）。

#　でも、サハラは背中を押してくれた。メノウは信頼を預けてくれた。千年前とは違う、どこか不器用な仲間の形が、なんでか愛おしいほど嬉しかった。

但如今，撒赫菈鼓励着自己，梅诺也对自己托付信任。这与千年前不同，像这样互相依靠着的关系，却不由得让摩耶发自内心地感到满足和快乐。

#「あなたたちって……本当にあなたたちよね」

「你们……真不愧是你们啊」

#「……どういう意味？」

「……什么意思？」

#「そういう意味」

「就这个意思」

#　すまし顔で答えて。マヤは小指を差し出す。

摩耶假装无事发生地回答了梅诺，然后向梅诺伸出了小拇指

#「しかたないから納得してあげるわ。代わりに、約束しましょう？　メノウがあたしに協力するっていう約束。あたしたちは、一緒に戦うの」

「既然没办法，那我就接受咯。但是，来做个约定吧？你会帮助我的约定。以后会与我一起战斗。」

#「もちろん、いいわよ。頼りにさせてもらうわ」

「当然，行啊。你就让我好好帮你吧」

#　メノウとマヤの小指が絡む。

梅诺也用小指和摩耶拉勾。

#「ゆーびきりげんまん、噓ついたら針千本のーます」

「（拉钩上吊一百年不许变）」（←会不会有点过于本地化）

#　いつか、サハラともした指切りげんまん。しかし、もう呪う必要はない。

是之前和撒赫菈也做过的拉勾。但这次，已经没必要留下诅咒了。

#「ゆーびきった！」

「拉勾！」

#　絡めた小指を軽快に離して、二人の少女は約束を交わした。

勾在一起的小指轻快地松开，两位少女定下了约定。

#

#「あはっ」

「啊哈」

#　飛ばしていた蟲から二人の会話を聞いていたアビィは、ひそやかに笑った。

利用她们身边的飞虫听到了两人的对话，雅比轻轻地笑了。

#　彼女は肩にサハラを担いでいる。瓦礫に埋まっていたところを救出して、ミシェルから十分離れた場所まで逃げていた。

她的肩头扛着撒赫菈。雅比把撒赫菈从瓦砾堆下救了出来，带她逃往足够远离米歇尔的地方。

#　今回の一連の事件で、『星骸』について、アビィの中で答えが出つつあった。確信を持てたのは、ミシェルとの戦闘時だ。結果として破壊兵器になる、という言葉で結論は出た。

通过这一连串的事情，雅比的心中对于『星骸』到底是什么这个问题也渐渐有了答案。而猜想得到确定则是与米歇尔战斗的时候。至于结论，则是：『星骸』终会变成一种强大的武器。

#　だが、それをいまメノウに伝える気はない。どちらにしても、使い方によっては世界を削ることが可能な戦略破壊兵器となるのは、事実なのだから。

但是，雅比却没打算立刻告诉梅诺这个消息。毕竟再怎么说，『星骸』终究是一个随着使用方法的不同，而有可能会毁灭世界的战略性武器。

#「やっぱり、あれを付いてこさせて、よかった。おねーさんとメノウちゃんだけじゃ、安定しすぎるんだよね。いい感じに事態をかき乱してくれたよ」

「果然，让那个年上跟上来是对的。要是只有姐姐我和梅诺酱的话，也太单调了。算是帮我把波澜不惊的事情增添了一点激情」

#　マヤがここに来られたのは、アビィの影に張り付くことを見逃したからだ。心底不愉快ではあったが、成果を上げた事実を認めるにやぶさかではない。

因为雅比看漏了藏在自己影子里的摩耶，才让摩耶得以走到这一步。虽然心里有些不愉快，但雅比也不吝于承认带上摩耶之后，此行得到了更好的结果。

#「お陰でメノウちゃん、だいぶ【時】を使ってくれた。あそこを割譲した代わりに、モモちゃんから代償をもらったかいはあったよ……君も、あと少しだから、待っててね」

「而且多亏摩耶，才让梅诺酱大量地用了【时】。让出那片地方也从茉茉酱那里拿到了不少报酬……你也是，已经快了，就再等等吧」

#　怪しく笑ったアビィは、下腹部の歯車マークをつるりと撫でる。

雅比露出怪笑，摸了摸自己下不服的齿图案。

#「くだらない世界を滅ぼすために」

「为了毁灭这个无趣的世界」

#『り』からやってきた魔導兵が、決然と自分の目的を呟いている、肩の上。

出身于『机关世界』的魔导兵，小声但坚定地说出了自己的目的。而她的肩头。

#　アビィに抱えられて片目だけ薄く開けていたサハラは、「うっわ、聞かなきゃよかった」という内心を隠し、そっと目を閉じて気絶したふりを続行した。

被雅比抱着，微微睁开一只眼睛的撒赫菈心想「唔哇，要是没听到就好了」。立即又闭上眼睛，假装自己还在昏迷。